
猫と転校生

miyoshi2155

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

猫と転校生

【Nコード】

N4246P

【作者名】

miyoshi2155

【あらすじ】

父親の都合で小さい頃から各地を転々としていた俺。

その度引越しを繰り返し、もちろん通っていた学校からも去らなければならなかった。

おかげで友達はいないし彼女もない。遊びだつて全然経験できてない。

でもそんな生活も、父親が家をローンで購入した事により、やっと終わる。

そんな感じの俺と、猫が大好きな女の子。あと馴れ馴れしいやつ。
今までとは違う学校生活で、俺はどう変わっていくんだろう。
期待半分、不安半分。そんな感じの物語。

猫と転校生

夏休みも終わり間近の8月29日の夜。

時刻は8時位だろうか。風はなく、空気はじめじめしているので気分が悪い。

「ふう・・・ったく。何で俺がこんな役目を・・・」

最近越してきたばかりの自宅から約1キロ程離れた空き地。

俺はそこに、一つのダンボールを抱えてやってきていた。

中には生後間もないと思われる子猫が一匹。

家の馬鹿な妹が拾ってきたものだ。

「大体こんなの、うちの親の性格考えれば結果なんてすぐわかるだろうに」

そう言つて俺は、ダンボールの中の子猫を見やる。目が合った。

「みいー」

「・・・・・・・・」

子猫は弱っているのか、ブルブルと震えながらこちらを見上げている。

俺にはその姿が、とても滑稽に見えた。

「はっ、こんなのどこがいーのか、俺には全くわからんね!」

ダンボールを乱雑に地面へ下ろす。

バランスを崩して転ぶ子猫。だが知ったこっちゃない。

俺は猫が嫌いだ。猫に限らず、動物全般もだ。

行く所々散らかすし、去勢やらなんやらで金もかかる。

トイレだって、散々苦労して、やっと覚えるんだろ?

やってらんねーと思うよ、マジで。

マーキングなんかされた日にゃ、発狂もんだろ。

そんなのを毎日毎日愛情こめて可愛がってられる奴等って

どういう神経してんのかね?

こんな事口に出したら、世の中の猫好きの人達にぶっ殺されそう

だけど。

「お前も気の毒な奴だよなあ。うちの馬鹿に拾われて、拳句また捨てられて。でもな、しょうがないんだよ。

人様には家庭の事情つてのがあるんでな。お前の住むスペースなんかうちには存在しませーん」

俺は猫相手に何言ってるんだろう。こんな場面妹に見られたら、平手打ちじゃすまないんだろうな。

俺は言いながらふと、妹の事を考えた。

俺の妹は、この猫を拾ってきただけあつて、かなりの猫好きだ。

小さい頃から二人とも、母親から動物に対する偏見を毎日の様に教え込まれていたのだから。

やっぱ友達がいるとこないじゃ、違ってくるんだな。俺は、家族が全てだった。

「ま、恨むんなら俺じゃなくてさ、前の飼い主・・・お前の事捨てた奴と、期待させた馬鹿を恨め」

・・・と俺は猫に語りかけた所で、ふと誰かの視線を感じた。

咄嗟に辺りを見回してみるが、誰もいなかった。

念の為に子猫からすこし離れ、無関係を装う。

「あぶねー。引っ越してきて早々こんな所見られたりしたら、変なうわさがたちかねん」

ただでさえ、今度の高校は期待できるんだから。

何がつて？友達作りだよ、友達。

俺は、小さい頃から引越し転校引越しに転校と繰り返してきた。

もちろん複雑な家庭だから、だとかそういうんじゃない。

単に父親の仕事の事情だ。

滞在期間とかもそんなに長くはなかったしなにより、俺たちは当時まだ小さかったから。

そんな事言つても、何故か妹は俺と違って友達いっぱいいるんだけどな！何で？

「まあいいや・・・いよつしよつと」

俺は立ち上がり、踵を返す。

「じゃな。もう会う事はねーだろーけど。誰かに拾ってもらえるといいな」

そういつて俺は、電話で母親から「早く帰って来い」との催促を受けつつ、帰路へついた。

それから二日後の、9月1日。

俺は担任に促され教壇に立ち、

「桑島永治です。よろしく願います」

俺はこれからクラスメイトとなる奴らに、自己紹介をしていた。

高校生活2年目にして、2度目の転校。人生で言ったら何度目になるだろう。

今までは、友達ができなくてもそれはしょうがない。

寂しさにもだんだん慣れてきた、と自分に嘘ついて過ごしてきた。でも、今回位は期待してもいいだろう。少なくとも、卒業まではこいつらとは一緒なんだから。

そういえば何故今回は期待できるのかを、説明してなかったかな。何を隠そう・・・、家を買ったのだ！それだけ。

仕事もやっと落ち着いて、今までのような頻繁な異動もなくなるらしい。

「何度も転校を繰り返していますが、特別家庭が複雑という訳ではないので、普通に接してもらえると嬉しいです」

頑張つて友達作つて、あわよくばかっかか彼女なんて作っちゃつて！

高校生活エンジョイしますか！と、俺は握った手に力を込めるのであった。

まああと・・・一年半しかねーけどな。

俺は自己紹介を終え、クラスの面々の自己紹介、質問等も終えろと、

担任から指定された席へと向かう。

窓際の一番後ろ。友達作りにはあまり適さない席だな。

だがまあ、いろいろな意味で特等席だった。

まずは見晴らしがいい。窓際ならではの、これはすぐに飽きるだろう。

そして寝れる。これは席が替わるまで使えそうだが、友達作るならまじめな印象を残したい。

つまりこの特等席は、俺にとってはあまりよろしくない環境だ。

この特等席が特等席たる所以は、別の所にある。

俺は隣の席の女子へ視線を向ける。

「あつ隣ですね。何かわからない事があつたら言つて下さいね」
この娘だ。

さっきのクラスメイトの自己紹介で、一番印象に残ったのがこの娘、「彩瀬香織」だった。

女子の中ではやや高めの身長にスレンダーな体系。

パッチリ開いた目には大きな瞳。まぶたもくつきり二重。

少しタレ目気味なのが俺的にグッド。

それになんだろう、この雰囲気。

同年代でこんなに大人っぽい奴がいるなんて・・・本当に同じ年だろうか。

今までに出会った女子達には無かった物で、俺にはとても新鮮に感じられた。

「・・・あ、あの。私の顔、何か付いてたりします?」

香織は頬を赤らめ、気まずそうにしている。

・・・っは!?!しまった。いつの間にか見惚れていたみたいだ。

香織はそのまま俺から視線を逸らし、しきりに顔に手を当てている。

「す、すみません。今まで人から話しかけてもらえる事ってあまり

なかったもんで。ちよつと感激しちゃってました」

すると香織はこちらへ視線を戻し、可愛くはにかんだ。

「ああ、そうだったんですか。クスクス」

あはははは・・・。

どうやら不審な第一印象は回避できたみたいだ。

俺が心の中でホツと胸を撫で下ろしていると・・・。

「ホントかよー？実は頭の中で香織の事値踏みしてる間に見惚れてたとか、そういうオチじゃねーの？」

まるで心を見透かされていたかの様な言葉が、俺の前方から聞こえた。

暗めの茶髪のショートカットで、整った顔立ち。だが化粧はしてはなく、シャツの袖から覗く健康的な二の腕や太ももには、そそるものがあつた。

確か・・・、水落星奈、だっけ？

「え？い、いや・・・ははっ・・・そんな訳、無いじゃないですか・・・」

今の言葉がなけりや普通に可愛かつたのに、何なんだ。このなれなれしい奴は・・・！

「ホントーかよ？今の内に香織の顔頭にインプットして、家帰ってからエロい妄想でもしよーとか、思ってたんじゃないのー？」

「ばっ・・・お前、本人の前でなんて事言つてやがる！？」

誤解されんだろ！大体今の視線のどこにそんないやらしい要素があつたんだ？単に見惚れ・・・いやいや、呆然としてただけだろ！そんな俺の焦りなんか気にせず、星奈は吹き出しつつ続ける。

「ふははっ、釣れた釣れたっ。てか何？その反応、もしかして図星なワケ？」

「て、テメっ・・・んなワケねーだろ！！」

このアマ・・・。ちよつと可愛い顔してっからって調子こきやがって・・・！

俺が眉間に皺をよせて睨み付けると、彼女は「怒った怒った」と

笑って。

「あはははは！冗談だつて冗談っ！それはさておき、あたしは水落星奈、よろしくね！」

さつき自己紹介したと思うけど、覚えてるかな？クワバラ君！」

「てめえこそ覚えてんのか！俺は桑島だ！」

このやろっ……散々人のこと馬鹿にしたあげく、早速名前まで間違えやがって……。

「あれ？そうだった？ははつまあいじゃんそんなの。細かい男は香織に嫌われるよー？」

「んなつ？！転校初日に名前間違えられて訂正しない奴がいるかよ！しかもそこで他の人の名前出すのやめてくれない！？」

そこで俺は気が付いた。

「あははっ……あはははははっ！」

初対面なのに、何でこんなに自然と喋れてるんだろっ。

隣で香織が腹を抱えて笑っている。

大人っぽいだけじゃなくて、こういった今時な面もあるんだな。

当たり前か。

「ん？どーしたの香織。今朝なんか変なもんでも食った？それともクワタ君に何か変な事でもされた？」

「桑島だっつの！……ってかごめん、ギャーギャーうるさかったですよね……」

そこで、俺は周りを見渡してみる。

俺は、厳密に言つと俺たちは、周りのクラスメート達から注目を集めていた。

そこで若干笑いの収まった香織が口を開く。

「い、いえ……。全然そんな事は……。ふふっ。二人とも、初対面なのに仲良いなと思って」

「え？」

今のやり取りを見て、どうやったらそういう見解に達するのだろう。

もしかしたらこの娘、結構天然なのかもしれない。

「ま、あたしにかかればこんなもんよっ」

コイツは真正銘の馬鹿だな。

そんな感じの高校生活第三弾初日。

なかなか幸先いいスタートなんじゃないかな？

誤解

その後、簡単なホームルームが行われた。
今日は始業式なので、授業はない。

朝登校し、昼に下校する。

転校初日のそんな短い間に俺は、星奈と香織。二人の女子のメルアドレスを手に入れた。

今思えば、星奈は以外と気が利くいい奴なのかもしれない。

自分から連絡先の交換を切り出し、ついでにと香織を巻き込んだのだ。

香織からしたら不本意かもしれないが、そこは気にしないでおう。

いつの日か、良かったと思わせてやるさ。

なんてな。

そんな最高のスタートを切った俺は今、妹の部屋にいる。
もちろん望んでいるわけではない。呼びつけられたのだ。
理由はいうまでも無い。

この前の猫の事だ。

俺の妹　桑島葵は、大層ご立腹だ。

「ねえ?!どこに捨ててきたの!?聞いてんでしょ!」

「まだ生まれたばっかなんだよ・・・!どうしてそんな事できるの!?!」

「最低・・・ほんと最低!あんと血が繋がってると思うと・・・
ほんとと最悪!」

いいたい放題の葵。せつかくのいい気分も台無しだ。

大体俺に言っただけなんになる?別に俺が捨てて来いと言ったわけじゃない。

俺は両親の決定に従ったまてだ。

基本的にうちの家系は、動物に対していい印象をもっていない。もちろん葵を除いて。

特に母親に関しては、天性の動物嫌い。

どれ位かと言うと・・・。

母親がまだ小学生の頃、友達に飼育係を押し付けられた事があったらしい。

そのときはまだ今ほど動物は嫌っておらず、まあいいか。と軽い気持ちで引き受けたらしい。

だが実際やってみると、その学校がいけなかったのかもしれないが、

長い間まともに掃除されていなかったのか、臭いは酷いわ汚いわ、虫は沸いてるわ・・・。

飼育されてた動物も良く生きてたな、という位酷い有様だったらしい。

元々潔癖症だった母親は、それに耐える事が出来ずそのまま不登校に。

それが半年程続き、その係を押し付けた子がその両親と共に菓子折りを持って謝りに来た事で

また登校する様になっただけだが、それ以降は動物に近づく事すらままならなくなってしまったらしい。

その事は、葵も知ってるはずなんだが・・・。

とにかく、このまま言われっぱなしってのも気に食わないしな。

ちょっと反論するか。

「お前さ、さっきから散々言っただけだよ？お前の行動自体に無理があるって事わかってる？」

「は？何、猫殺しの兄貴が偉そうに説教するわけ？！」

葵も負けじと食いついてくる。

「お前だって昔から、母さん動物駄目だって知ってたんだろ？」

「そりゃ・・・、知ってるけど、さ・・・」

「じゃあ何で拾ってきたんだ？もしバレた時の事ってのは、考えなかったのか？普通だったら猫拾った時点でここまで予想は出来ると思っただが・・・？」

俺は若干偉そうに説教をたれる。さっきまで散々言われた分の腹いせだ。ざまーみる。

ちなみに、俺と葵の仲は悪くない。むしろ仲良し兄妹といっても良いほど仲は良い。

たまにこう、意見が分かれたりすると今みたいに口論になるが、それはまあ・・・あれだ。

喧嘩するほど仲がいいってやつだろう。

「・・・って・・・だって・・・」

葵は俯き、消え入りそうな声で何かをつぶやいていた。

「あ？何だよ？きこえねーよ」

そこで葵は、ギリツと齒軋りした。指は忙しく動き、無意識中に膝をひつかき、傷つけている。そして顔をあげ、

「・・・だって！！だってあそこで拾ってなかったら・・・あの子死んでたもん！あたしが拾って、少しの間だけど世話して、少しだけだけど元気になってきてたもん・・・！」

葵は顔を真っ赤にして、目に涙をためて、必死に食いついてくる。きつと認めたくないんだろう。だって・・・。

「だからどうした？少し元気になったって、家じゃ満足に飼えないお前だっけ見つかったらどうなるかわかってたんだろ？他の飼い主だっけそんなにすぐ見つかるわけじゃない。お前は自分の力量以上の事をしたんだよ。背伸びし過ぎ、少し自重しろ」

葵は俯き黙っている。聞いては・・・いるんだろう。

「これは言おうかどうか迷ったが、言っておく。お前はさっき俺に『猫殺し』だとか言ってたよな？」

ビクツと、葵の体が強張る。咄嗟に両腕で耳をふさぐとするが、俺はそれを制する。

「それってさ、飼えもしない癖に無責任に拾ってきた、お前の方な

んじゃないの？」

「・・・うあつ、えぐっ・・・ううう・・・」

泣き出す葵。

こいつも、拾う事でどうにかなるとは思っていなかったんだろう。もちろん無責任だという事も。

ただ、自分の好きなものが目の前で死にそうになっているのが、放っておけなかったんだ。

優しいのは良いことだが、その優しさが必ずしも良い結果へ繋がるとは限らないという事が、葵もこの件で嫌という程思い知っただろう。

俺は必死に嗚咽をこらえている葵へ目をやる。あ、そういえばあの時。

「あの時、俺が猫置いてきた時さ。誰かが見てる気がしたんだ。視線を感じたというか・・・気のせいかもしれないけど」

「もしかしたら、そいつが拾ってくれてて、その猫は今もそいつんとこで元気にやってるかもしれないな」

葵は怪訝そうに、赤く腫れた目でこちらを見上げる。

「だから、そういう未来もあるかもなつて事。大体、元はと言えば最初捨てた奴がいけないんだから、別にお前がそこまで気に病む必要はねーだろ」

「でもっ・・・」

「あーもう！うるさいっ！この話はおしまいおしまい。じゃーねー」
俺はクッションから腰を上げ、早々に部屋を出ようとする。

その際時計をチラッと見ると、時刻は午後3時を指していた。

「・・・昼寝でもすっか」

「・・・ありがとう」

後ろを振り返ると、さっきまで号泣していたとは思えない様すがすがしい顔で、葵は微笑んでいた。
流石に目はまだ腫れているが。

「いつも、ありがとう。お兄ちゃん」

これはいつからかは忘れたが、口論になると解決した後には葵が必ず口にする言葉だった。

どういう意味があるのかはわからないが。

「へいへい」

いつもの様に軽く受け流し、俺は自分の部屋へと戻った。

あの始業式の日から数日が経った。

無事妹とも仲直りできたみたいだし（別に俺は何も悪い事をした訳ではないが）

学校の方も、うまく行きそうな感じだし。

いつもなら家族に起こしてもらっていた平日の朝もこうして、自分から起きれるようになった。

時刻は6時50分。ちと早いかな。

それだけ、俺は学校に行くのが楽しみなんだろうな。

俺はちんたらと学校指定の制服に着替え始める。すると、ブツブツ

携帯に着信が入った。母親からだ。

「永治、朝よ。起きなさい」

「起きてるっつーの」

「あら、そう。珍しい日もあるもんだねえ」

そういつて母親は電話を切る。

うちの母親は、何か用事があればすぐ携帯を使って要件を言うてくる。

携帯って便利だよなあ。

直接相手の元へ行かずとも言葉を伝えられる。

俺もいつかこの便利機器を使って、あいつらとあんな約束やこんな約束、してみたいもんだぜ。

そんな事を考えながら、俺は途中だった着替えを終わらせ、家族のいる一階へと向かう。

「おはよう」

部屋を出た所ではったりと会った妹に、そっけなく言われる。

こいつは俺と口論になり、それが解決するとしばらくの間こんな感じでそっけなくなる。

なんでだろうな。別にこっちはもう気にしてないんだから普通に接してくればいいのに。

葵はこちらへ視線は向けず、そのまま一階へ下りていった。

俺も後を追って、リビングへ向かう。

そこには新聞を読む父親と、食事の準備で疲れたのか、母親は椅子に腰掛けまったりとしている。

おはよう、と両親に挨拶をする。

「おはよう、早く食べちゃいなさい。結構時間たってるから」

テーブルの上にあるのは、人数分の茶碗と取り皿に乘せられたス克蘭ブルエッグ、ミートボール、ちぎられた野菜。

完全に手抜きだけど、まあ朝飯なんてこんなもんだろ。他の家は知らないが。

俺は茶碗にご飯をよそい、席についてのんびり食べ始める。

「いただきます」

俺の言葉を皮切りに、今の今まで新聞を読んでいた父親もそれを横に置き、食事を始める。

食べ始めたと同時に、物凄く喉が渴いている事に気づく。

やっぱり夏だな。クソ暑い。部屋のクーラーには、電気代がかさむのでタイマーをセットしており、寝静まった頃に自動的に消えるようにしてある。

俺はテーブルの中央に置いてある麦茶を取り、グラスに目一杯注ぐ。それを一気に飲み干す。

「ああー・・・、麦茶うめー」

体の内側から冷えてくる。やっぱり夏は麦茶だな。

そして俺が飯に箸をつけると同時に、玄関のチャイムが鳴った。
誰だろう？

「あら、誰かしらね。こんな時間に……。まだご近所に挨拶もしてないのに」

いや、しろよ。越してきて何週間たつてんだよすでに。

母親が玄関へ向かうのを横目に、俺はそんな事を思っていた。

「いつもすぐ引越しちゃうから、挨拶するのも途中で諦めてたしね。やってられつかめんどくせー、って」

葵も同じ事を思っていたのか、そんな事を口にする。そうだったのか。

俺はミートボールを1個ほおばる。若干冷たい……。

ん？何だか玄関の方が騒がしいな。なんかあったのか？
すると母親がリビングへ戻ってきた。

「永治！あんた、友達来てるよ！」

悪い夢でも見たかのような表情で母親が言ってきた。

やめろよ、俺滅茶苦茶寂しい奴みたいじゃん。

実際そうなんだけど。

「え？誰それ。人違いじゃないの？」

とはいえ俺も、まだ転校したてで日も浅く、そんな朝に家の前まで迎えに来てくれるほど

仲の良い友達なんてのはいないからな。母親の妄言だとは思えない。

「ほんとほんと！星奈ちゃんって娘が『永治君いますかー？』って！あんたいつの間に……！」

それを聞いて俺は思わず口の中から米粒を吹き出しそうになる。

「はっ！？あいつ何で……！」

俺は慌てて箸を置き、玄関へ向かう。

「何々？お兄ちゃん彼女！」

何故か妹がついてくる。彼女じゃねえ。てか茶碗置いて来い。
リビングから玄関へと繋がる扉を開け、視線を向けると……。

そこには確かに水落星奈がいた。

「ういつす、おはよー。ん？そっちは妹さんかな？水落星奈でーす、よろしく」

「あつ、よつよろしくお願いしますっ・・・ああ葵ですっ」

いきなり話を振られあたふたする葵。何テンパってんの？

「いやよろしく、じゃなくて！なんでお前ここにいんの？」

「え？やだなあゝ、迎えに来たからに決まってんじゃーん。にぶちんなくわっち！」

俺の抱いて当然の疑問に、星奈は当たり前の様に答える。

わかるよ、この状況でなら迎えに来た事くらいわかるよ・・・。

でも、何で？

てか『にぶちんなくわっち』って、何？考えろ、考えるんだ！

普段よりあまり寝ていないせいか思考の鈍った頭を、フル回転させて考える。

「えーっと・・・」

落ち着きを取り戻した葵が口を開く。

「あの、水落さんって。その、お兄ちゃんの・・・」

「んなワケねーだろっ！！」

思わず叫んだ。何聞こうとしちゃってんの？こいつは・・・！

「星奈でいいよー。んまあ、あたしとくわっちの関係は、葵ちゃんが想像してるので合ってると思うよ？」

星奈はニヤニヤしながら俺を見て、そんな事を口にした。マジ勘弁してくれ。

「お兄ちゃん、頑張りすぎ・・・。どんな手使ったの？」

若干引き気味の妹は、遠慮がちに聞いてくる。

「うるせえ！ちげえつつってんだろ！只の友達！と・も・だ・ち！」

俺は必死に弁解するが、妹は納得してはくれないみたいだ。

「ただの友達って、転校してまだ何日も経ってないのに、家までお迎えだよ？普通そんな事・・・」

葵は、箸が床に落ちるのを気にもせず、悪い夢でも見たかのように

な表情で執拗に絡んでくる。

「もういい！行くからなっ」

俺は妹の視線から逃げる様に、星奈を連れて家を出た。飯食えてねえし、何なんだ今日は……！

てか、転校したてで家に迎えに来る友達より、そんな短期間で彼女作れるかって方を疑ってくれよ……。

俺は頭の中で葵に文句を言いながら、星奈を連れて近くの公園までやってきた。

そして、星奈を連れて家を出る際に繋いだと思われる手が、未だ繋がれているのに気づき、勢い良く振りほどく。

「いったいなー！女の子はデリケートなんだから、もっと優しく扱ってよねー！ぶんぶん」

今時ぶんぶんとか、昔住んでた田舎でも聞いた事ないぞ……。知るかつ！てか星奈！お前のせいで飯食うどころじゃなくなっちまったじゃねえか、どうしてくれるんだ！

俺は満たされなかった腹を押さえつつ、星奈を睨みつける。

「あはは！葵ちゃんには何か誤解させちゃったみたいだね？ごめんごめーん」

こんなにも華麗にスルーされた事も、謝られてる感じの無い謝罪も、人生で初めてだ。マジで飯食えなかったのキツいんですけど星奈さん。

「あのな……、お前わざとあんな言い方したろ？人の不幸を楽しみやがって……」

俺はもうコイツに何を言っても無駄だと判断し、歩き始める。

「え？何、永治君はあたしと恋人同士だと思われる事が不幸だっていうんだ？悲しいなあ……」

星奈は声のトーンを落とし、がつくりうな垂れる。

こいつがやるとマジなのか冗談なのかわからなくなってくる。

てかどっち？マジだったら俺、このままスルーしちゃっていいの？ああ……、オッサンこっち見てるよ。

「ああいや、違う。そういう訳じゃない。ああもう、こんな公衆の面前で泣くなっ、泣くなあ！」

通勤、通学で今の時間人は多く、周りからは少なからず視線を集めてしまっていた。

きつとこいつらからは、『朝っぱらから彼女泣かせた修羅場直前の倦怠期カップル』とか思われてんだろうなあ。

星奈は小さく小刻みに揺れている。嗚咽を我慢しているんだろうか。

俺はどうしていいのかわからなかった。かといって無視する事も出来ない。

何か言葉をかけようかと思ったが、今更何を言ってもやればいいのかすらわからない。

くっそ、俺が何をしたって言うんだ・・・！

そんな居心地の悪い状況の中、しばらく歩いていると。

「くう・・・くくく・・・ふははっ、ばっかじゃねーのー！」

星奈がいきなり吹き出した。

そこで俺は改めて、この「水落星奈」という人間がどういう奴かって事を思い知らされた。

こいつは・・・！

「何本気にしちゃってんのー？マジつけるわくわっちー！うひひっ。ほらそんな顔してないで、

今からでも優ーしく抱きしめて、頭でも撫でながら『俺が悪かった、許してくれ・・・星奈！』とか、

言っちゃってもいいーんだよー？」

「んな事誰が言うかあああああ！もう知らねえ！！」

俺は周りも気にせずそう叫ぶと、星奈を置いて早足で学校へ向かった。

星奈はもちろん追いかけてくる。

「あーん！まってえーんだーりんっ。最近つれないぞおー？」

最近も何も、つい今週会ったばかりだろうが、このアマ・・・。

俺はもうコイツにつつこんでも無駄だと悟り（今更）例え腕を組まれようが

二の腕に柔らかい膨らみが当たっていようが、平静を装うのだった。

こんな会話が聞こえた。

子供と母親の、何気ない日常会話だ。

「まー、あれって、ばかっぶるってゆうんでしょー？きのう、テレビでやってたー」

「コラ！聞こえるでしょ！やめなさい！！」

・・・。

星奈はこれでもかと腕を絡め、

「ううーんダーリインっ。どうしてそんなそっけないのぉ？いつもの優しいダーリンどおこぉ？」

腰をクネクネさせ、俺にぶら下がるような感じで、歩いていた。

こいつ、公衆の面前で恥ずかしくないのか・・・？

通りすがりのオバさんには「ぷぷっ」と笑われ、お姉さんにはドン引きされ。

中学生にはすれ違いざま爆笑された。

・・・、もう、死にたい。

結局そんな感じのまま、学校へ向かう俺だった。

帰り道

「おっはよーっ！」

星奈は勢い良く扉を開け放ち、皆へ朝の挨拶を言い放った。

だが、それはもういつもの事なのか皆は驚く事なくおはよう、と愛想よく返してくる。

それにしても朝からテンションたけえなコイツ……。

俺も続いて挨拶をする、ん？

クラスの皆から、何だか嫌な視線を感じるんだが……。何なんだこの差は！

そこで原因と思われる星奈を見る。

そいつは、ニヤツと意地の悪そうな笑顔を浮かべていた。

俺はコイツに、大事な高校生活を駄目にされるのかな……。

思わず涙腺が緩んでしまいそうだ。

なんて事を考えながら席につくと、少し遅れて担任が教室へやってきた。

「えー、ホームルームを始めます」

そう言って担任は教壇に立つ。するとクラスの皆は揃って口を閉ざす。

結構ギリギリだったんだな。まあ星奈が腕組んできた所為で歩幅を合わせなければいけなかったからしょうがないのだけれど。

そこでふと視線を感じた。そちらを見やると、香織が慌てて視線を逸らした。顔が真っ赤だ。

そこで、いつかのセリフが頭をよぎった。

「あの……俺の顔、なんか恥ずかしいもんでもついています？」

「恥ずかしいもんで何だよ！」

星奈が吹き出しつつ言った。

「う、うるせえな！なんだっていいだろ、別にっ」

すると、バシッと何か硬い物で頭をたたかれた。

担任だ。どうやら名簿の裏側で叩かれたようだ。

「五月蠅いのは君だよ、桑島君。点呼でも返事をしないし。いるんだっいたらいるで言わないと、今度から欠席にしちゃうよ?」

しまった、ホームルーム中だったか……。ついさっきの事なのに、いきなり忘れてた。

やっぱり飯食えなかったから調子悪いのかな……。

周りの奴らからすれば俺は、協調性皆無で中学生気分の迷惑野郎みたく見えてるんだろう。

ほら、学級委員の（名前は忘れた）超まじめそうな娘が、こつちを睨みつつ鼻を鳴らしていた。こええ。

香織を見ると、顔は真っ赤のまま目を三日月の様に細め、腹を抱えて笑っていた。

只それは、星奈とは違い意地悪っぽさなどは無く、純粹に可愛いと思える笑いだっただ。

「桑島君? 聞いているのかな?」

気づけば担任が、名簿を金具の着いている面に持ち替え構えようとしていた。

「あつ、いや、っはい! わかりました聞いてました! こ、今度から……気を付けます」

「ならいい、頼んだよ?」

そう言々と担任の先生は（確か田中先生）、踵を返し教壇へ戻った。

「えー、誰かの所為で長引きましたが、これでホームルームを終了します。1 時限目は数学ですので、各自用意を忘れないように」

「「はい」」

うわぁ……。あの先生に俺、完全に目えつけられたっばいな……。

担任の田中先生が教室を後にすると、クラスの皆は気がぬけたのか、だらけ始めた。

一気に騒がしくなる教室。今朝、俺と星奈の姿を目撃した奴はこ

の中に何人いるんだろう。

変な噂とかされてたら、嫌だな。

そんな事を考えながらしばらくぼーっとしていると、前の席から手紙が回ってきた。

手紙といっても、ノートの端を切り取って折りたたんだ簡素なやつだ。

星奈からか、何だろう。

手紙を開いてみると、そこには

田口先生マジで厳しいから、今後気をつけた方がいいかもね！マジで欠席にされるし、成績も私情普通に挟んでくる人だからと、妙に丸みを帯びた書体で書かれていた。

これが事実なら、後で田口先生（田中だった気がするんだが）には謝っておこう。将来の為にも。

「どうしたんだ？お前。顔気持ち悪いぞ？」

前の席の男子（そういうえばこいつとはまだ喋った事無いな）が星奈に話しかけていた。

俺はその時星奈の顔が、意地の悪い笑顔で覆われている事を知ることになった。

俺の通っている高校では、二学期の初めに担任による個人面談があるらしい。

星奈は今日が丁度その日で、香織と今生の別れかという位熱い抱擁を交わした後、面談室へと向かった。

俺と香織は前半で消化しているので、今日はこの二人で帰る事になった。

二人きりになってみると、案外話のネタが出てこない事に気づいた。

今までは星奈がいて、事あるごとに俺にちょっかいを出してきた

そこから会話が發展していく感じだったのだが。

くそつ、何を話せばいい・・・！

俺は焦っていた。しかもかなりだ。

せつかく香織と二人きりになれたのに、何もとまでは行かないがほとんど会話を交わさずに別れるのは、勿体無さ過ぎる。

な、なにか・・・何か話しのネタはないか・・・！

俺がそんな事で思考を巡らせていると、

「あつ、猫！」

唐突に香織が走り出す。・・・猫？

俺は、香織が向かった方向へ視線を向ける。

そこには駐車場と、そこに停めてある軽トラが一台。

猫なんてどこにもいないじゃないか。

俺はそのまま香織を追う事はせず、歩きながら眺めていた。

しゃがむ香織。ああ、トラックの下にいたのか。関心無さ過ぎて

気づかなかった。

「もーっ、何で逃げちゃうのーっ？」

待ってーと、香織は猫を追うのに夢中になっていた。よっぽど俺との無言の下校が退屈だったんだろう。

くそ、猫が羨ましい・・・。

俺は敵意をむき出しにして猫を睨みつける。

それに反応しているのかしていないのか、猫は相変わらず香織から逃げ続けている。

ははは！お前が香織と戯れるなんざ、後10年はえーんだよ！

気づけば口元が凶悪にひん曲がり、気持ちの悪い笑みが浮かんでいた。

「あつれえ〜？どっか行っちゃったよー。あゝあ」

うなだれて戻ってくる香織。なんだかかなりがっかりしている様に見える。良くわからん。

ここで何か明るく楽しい気分になれる話題をポンツと出せばいいのだが、

長年友達のいない俺にそんな高等技術等ある訳もない。

「猫、好きなのか？」

取り敢えずは普通で行こう、普通で。そういう知恵をつけるのは慣れてからでも遅くは無いはずだ。

「うんっ、大好き。超好きだよ！そりやもう、朝から晩まで猫見るだけで生きていけるって感じ！」

「そ、そうなのか・・・ふーん」

おお・・・、いきなり元気出たなコイツ・・・。てか俺！ふーんって何だふーんって！もつとマシな返答とかあんだろ、おい！

「桑島君は、猫好き？好きだったらいいなーっ。あたし、猫好きだけれどさ、友達とその事で喋れる人ってあんまないんだよねー！」

よくもまあ、こんなに楽しそうに喋れるな・・・。多分、今まで見てきた中で一番楽しそうだ、コイツ。

ここは『もちろん好きさ！君と同じ位』とか言っちゃいたいけど・・・！やっぱり嘘をつくのは良くないよな。

俺も本当の自分を知っておいてもらいたいし。別に趣味が合わなかっただけで友達でいられませんっ！って事もない・・・だろうし？

「ゴメン、俺・・・猫は駄目なんだ」

俺は申し訳なさそうに、そう言った。

すると香織は、さっきまでの元気はどこへ行ってしまったのか。寂しそうな面持ちで「そっか・・・」と呟き。

「・・・ご、ごめんねっ。何か一人で舞い上がっちゃって、う、ウザかったでしょ？」

申し訳無さそうに、謝ってくる。

「いや！全然そんな事ないよ。何かその・・・か、可愛かったしっ！」

「・・・え？」

香織の顔が固まっている。まるで俺の言葉で石化でもしてしまったみたい。

いやいやいやいや！今の無し、今のなーしっ！

予想以上に香織が落ち込んでしまったとはいえ、何言ってるんだ俺・
・！テンパリ過ぎだろ！！

慌てて弁解する俺。

「い、いやっ・・・猫がな！いやっ猫もな！！」

「あ、う・・・うん」

そこで香織は普段の表情に戻るが、俺の弁解になっていない弁解も空しくまたさっきまでの空気に戻ってしまう。

その間俺は何度か会話しようと試みるが、結局何を喋ったらいいいのかわからず断念した。

俺って香織の事、全く知らないんだよな。星奈がいなかったら今日までの会話も、それ以降の会話だってなかったかも知れない。

そのまましばらく歩き続けると、十字路に差し掛かった。

そういえば香織の家はここを左だったか。俺はこのまま直進だ。

結局何も喋れなかったな。

「じゃ、じゃあ。私、こっちだから・・・」

香織はそう言っと、バツと俺から離れた・・・様に見えた。被害妄想かな？

俺は香織の行動に少し気落ちしながらも、何も返さないのはまずいので・・・、

「あ、うん。じゃあまた、明日」と、俺。

「バイバイ」

逃げる様に別れを告げる香織。てか実際逃げてんのかね？

何か気持ち悪い事言っちゃったしな・・・。フラグ折れたかなあ・
・・・？

そんな心配してる間にも、香織の姿は小さくなっていく。こっち振り向いたり、しないかな。

俺は、香織の姿が見えなくなるまで、その場で立ち尽くしていた。結局香織は、振り向かなかった。まあ当然だな。

ゲーセンで

それからというものの、星奈の個人面談も終わり、またいつもの三人に戻っていた。

俺と香織は、お互いから喋りかける事はなく、星奈が出すちょっかいをキツカケに笑ったり、少し言葉を交わす程度。

やっぱあの時、嘘でもいいから『好き』と言っておくべきだったのだろうか……。

だが、そこでそう言ってしまったら、これからずっと猫好きの俺でいなくてはならない。

俺には、好きでも何でもない猫を、真面目に好きと言っている人の前で好き好き言えるはずとくない。

てか絶対どこかでボロが出るだろ。

もしボロが出て、バレるような事になれば、二人の関係は修復不可能になり、今後一切関わりを持つ事が出来なくなるだろう。

それだけはどうしても避けたい。なんとか別のフラグをたてなければ……。

香織は、俺の事どう思っているのだろうか。

「はぁ……」

俺はため息をついた。

つてか、転校してきてまだ一週間ちょっとしか経っていないのに何考えてんだ俺は。

星奈が馴れ馴れしく絡んでくるから、きっとそのせいでちょっとおかしくなってるんだ。きっと。

でもまあその星奈も、最初こそ鬱陶しかったが、最近はちょっと有難く思えてきた。

「どうしたの？くわっち、何かいい事でもあった？」

ぶっっちゃけコイツがいなかったら俺は、未だに友達と呼べる友達……いなかっただろう。ため息をつく。いい事があった。どう

いった感性の持ち主なんだろうと度々疑問に思うが。

ちよっとだけ、感謝だな。

「フン、なんでもねーよ」

という感じで俺は今、星奈と伊藤君（俺の前の席の男子、この前星奈のおかげでやっと思えた）との三人で、

ゲームセンターに来ていた。

俺は友達と一緒にどころか、ゲームセンターという場所自体来るのが初めてなので、かなり緊張していた。

周りはガヤガヤ五月蠅いし、何やら怖そうな兄ちゃん達がタバコを吹かしながら格ゲー？に勤しんでいる。

プリクラからはやたらとケバい女の子が出てくるし、太鼓のゲームなんかにはもの凄い速さと動きでかつ正確にリズムを刻んでいる中年のオッサンなんかもいた。昼間から何やってんだ、休みなのだろうか。

「こ、ここが・・・ゲームセンターなのか・・・」

俺は緊張した面持ちで辺りをキョロキョロと見回している。すると星奈が近づいてきた。

「ねねっ、くわっち。握力測ろうよー！」

握力？わざわざそんなもの測る為に100円も使うのか・・・。

最近のゲームの趣旨はあまり良くわからん。

かといって、せっかく助け舟を出してくれたんだし、実際俺も何もしないでこの場に立ち尽くすってのもあまりいい感じがしないしな。

取り敢えず乗っておこう。実は握力には結構自信があったりなかったり。どっちだ。

そのまま星奈について行く俺。そこでは、すでに伊藤君が握力を測定していた。

「くぬっ・・・うるああああー！」

顔を真っ赤にし、青筋まで浮かべた伊藤君は腹の底から唸り声をあげている。

そ、そこまでするか・・・普通。

俺は若干引いてしまった。

伊藤君はすでに右手の方は測定し終えた様で、今測定しているのは左手の握力だ。

左の方も測定が終了したのか、握り手から手を離す伊藤君。おいおい、息あがつてるぞ？

「はぁ・・・はぁっ・・・、い、今のはかなりいい線いったハズだ・・・」

満足気に言う伊藤君。

「手ごたえはあったの？」

星奈が首を傾げ尋ねる。何だろう、こう・・・外から見ると、星奈もなかなか可愛いんだよな。

「あつたあつた！今の瞬間ぜってー俺スーパースァヤ人なってたから！」

伊藤君は腰に手を当て、得意げにそう言う。
すると、画面に結果が表示された。

この握力を測定するゲームは、右手左手の握力を測定し、最後に両方の結果とその平均を出す感じらしい。

さて、伊藤君は100年後まで破られる事の無い大記録を出す事が出来たのか。

右手「49kg」、左手「40kg」、平均「44.5kg」。

出来なかったようだ。星奈はその結果を見て、「ぷぷつ・・・ふ、普通・・・！」と吹き出し笑っていた。

当の本人は、「何でだよー！ぜってーいけると思ったのにー！」と地団駄を踏んでいる。

「なーにがスーパースァヤ人だ！ばーかー！」

笑いながら伊藤君をけなす星奈。

俺にもその内、こんな感じで話しの出来る友達が、出来るんだろうか。

出来たらいいな、と星奈へ視線を向ける。まだ笑っている、しかもしやがみこみながら。そんなに可笑しかったのだろうか？

そこで俺からの視線を感じたのか、星奈もこちらを向き、視線が合う。

「ささっ、くわっちも計ってみなよ！」と俺の手をひっぱる星奈。で、手が柔らかい・・・。

星奈はバスケ部に所属し（しかもエース）、毎日のようにボールを触っているのもうちよつと硬いのかと思ったが、そんな事はなかった。

先週あたりに手を繋いだ時があつたが、あの時はそんな事を考えている余裕なんてものは存在しなかった。

あれ以来葵の、俺を見る目が変わってきている・・・気がする。

「わ、わかつたから！そんな引つ張るなつて・・・！」

俺は若干照れつつも、そのまま引つ張られ筐体の前に立つ。

伊藤君の視線が痛い気がする。俺何かしたかな？

ま、彼には彼の事情があるのだろう、と俺は気にせず「さて、やりますか！」と半袖のくせに袖をまくる仕草をする。

硬貨の投入口に100円を入れ、画面の指示に従い測定器を握る。そして力を目一杯込める。

「ふぬおおおおおおお！！！！おおっ！？」

やべ・・・、声出ちゃった。

赤面する俺。伊藤君に目を向けると、彼は「ブリーだ・・・ここにブリーがいるぞ・・・」と意味不明な事を口走っていた。

ブリー・・・、ブロッコリー？俺はそんな頭してねえぞ。

右手の測定が終了した。俺は手を離し、視線を伊藤君から筐体の画面へと向ける。

「62kg!？」

そこには、とても自分が出したとは思えない記録が表示されていた。

「うえーっ！！凄いじゃんくわっち！男バスにもいないよそんな

強い奴っ！」

口に手を当て、素直に驚いている星奈。ほお・・・、コイツもこんな仕草するんだな。

俺は何も言わず、握りこみ痛くなった右手を開閉しなると、画面の指示に従い今度は左手で測定器を握る。

「くぬ・・・うるあああああ！！！」

やつぱり出てしまう声。なんて恥ずかしい奴なんだ俺は・・・。
しかもさっきの伊藤君と同じ様な声で。さっきは引いてごめんな・・・。

またも赤面してしまう俺。でもいつかは、こんなのも普通になつてしまふのだろうか。

考えると少し寂しいな。

左手の測定も終了し、俺は左手を離す。

画面に表示された結果は、55kg。平均すると58.5kgか。

「凄い凄いくわっち！何かスポーツでもやってた？？」

測定が終わるや否や、星奈が尋ねてきた。

握力ごときでそんな騒ぐなよ・・・。とか言う俺も口元が若干二ヤけてしまっている。

持ち上げられるのも、悪くないな。

「いや、今は特に何も。昔小さい頃に柔道ちよつとやってた位だよ。相当昔の事だけだな」

確か2、3ヶ月で辞めた気がする。父親の異動のせいだ。

「へえ」。じゃあやつぱ、アレか！日頃息子をしごきあげてる成果なんだね！これは！！」

そう言い、いやらしく笑う星奈。

これは、相手が同級生でしかも女子の為、『ああそうだぜ！毎日息子で鍛えてるんだぜ！』とか軽々しく言えない。

返答に困ったので、「馬鹿じゃねーの」と流しておいた。

伊藤君はと言うと、何だか面白く無さそうな面持ちでこちらを見ていた。

「達哉、何やってんの？こっち来なよ」

星奈が促す。伊藤君はそこで『チッ』と舌打ちし、

「いや、俺帰るわ。実は予定あるし。じゃーね」

と、早々にその場を立ち去ってしまった。一体どうしたのだろうか？

これについては、星奈も理解出来なかったらしく、俺を見て不思議そうに肩をすくめた。

「まあいつか！あんなの気にしないで、二人で楽しもうよ！」

そう言々と星奈は、またも俺の手を握り（少し汗ばんでる）、次のゲームを探し始めた。

「・・・、手は別に繋がなくてもいいんじゃないか？」

「繋がないとくわっち、迷子になるでしょー？」

なる訳ねえだろ！と言ってやりたかったが、正直ここで別れたらちゃんと合流できる自信はない。

今星奈に連れられて店内を移動していて気づいたが、このゲームセンターかなり広い。

外から見ただけでは気づかなかった。きっと奥に広がっているんだろう。

俺は仕方なく我慢し（ちょっと嬉しい）、星奈の手の感触を楽しんでいた。

「くわっち！次はこれやろうよ！」

星奈が指差したのは、やたらとゴツい銃の形をしたコントローラーが2つ置いてある、巨大なビデオゲームだった。

このコントローラーを画面に向けてトリガーを引く事によって、画面中のゾンビ達を蹴散らす。

いわゆるシューティングゲームみたいだ。

今は俺と星奈二人だけなので、都合のいいゲームだった。しかも中々面白そう。

「よし、やるか！」

俺は快諾し、硬貨を投入してコントローラーを利き手に持つ。

画面に銃を向け、トリガーを引く事でメニューを選んでいく仕組みらしい。む・・・、なかなかやり辛いな。

星奈は、コントローラーが重いのか、片手から両手持ちに変えている。

確かに重い・・・けど、男の俺が両手持ちなんてやっていたら「あいつカマか？気持ちわりー」とか、ナヨナヨした感じの男に見られてしまう。

自意識過剰だとは自分でも思うが、なんだろう。踏み切れなかった。

全ての設定を完了し、筐体に設置されているスタートボタンを押す。

ゲームスタートだ。

移動自体は勝手に行ってくれるので、プレイヤー側は只出てきたゾンビをかたっぱしから撃って行くだけでいいみたいだ。

序盤でコツを掴んだ俺は、軽快にゾンビを撃ち倒していく。

「ぎゃーーーーー!!!」

突如星奈が叫んだ。

何事かと思い星奈を見ると、懷から財布を取り出し、新たに硬貨を投入しようとしていた。

「くっそ・・・！悔しい！もう一回！リベンジっ！コンティニュー！！！」

画面を見ると、星奈に割り当てられた画面は薄暗くなっており、上の方から血が滴り落ちていた。

そして中央には『コンティニュー』と書かれ、カウントダウンが始まっていた。なるほど、こいつ・・・。

「星奈、お前ってこういうの、下手なんだ？」

ちよつとからかってみたくなった。

いつも馬鹿にされてる仕返しだ！ざまーみろい！

すると星奈は怒っているのか、珍しく声を荒げて反論してきた。

「うつさい！黙ってる！！今に見返してやるんだからぁー！！！」

なんとかカウントダウンに合った星奈は、再びコントローラを構え、「よっし、掛かって来い！」と張り切って打ちまくる。だがすぐに弾切れ。しかも撃った弾はほとんどゾンビには当たっていない。

「何でー！？あんでくわつちはそんな当たるのにあたしのは当たらないんだよーうがー！！」

ライフをまた全て削られた星奈は、再び硬貨を投入しコンティニュー。

そして速攻で死亡。コンティニュー。死亡。コンティニュー。

結局最初のステージをクリアするまでに、星奈は1700円も使っていた。下手過ぎだ。

ちなみに俺はノーダメージクリア。俺すげー。

この結果に不満なのか（まあそうだろうな）星奈は「もういい！次、次行こ！」と鼻息を荒くし、俺を引っ張って筐体から離れていった。

俺としてはこのゲーム、まだやりたいんだけどな。今度、一人でもいいから来るか。

誰かと来るにしても、星奈とはやめておこうと心に誓いながら、俺はあてもなく彷徨う星奈についていった。

あれから色々なゲームをやった。

物によつては、星奈が激怒したり、今度は俺が激怒したりと。傍から見れば「何だコイツら？」みたいな感じだっただろう。

でも今思えば、割と楽しかったかもしれない。

伊藤君が何故帰ってしまったのかは未だにわからないが（勿体無い）、何だろう。

今までこういった体験をほとんどしていなかったから、新鮮だったのかな？それともただ、こういう場所で遊ぶと、楽しいのか。

俺はマンネリという物も経験した事がないから、こんな事すらあまりよく分らない。

まあ、その内わかるようになるか。その時までこれは保留にしておこう。

「それにしても、良く遊んだなあー。こんなん初めてだから、疲れたわ」

「わたしも、流石に疲れたよー・・・」

星奈はスロットの椅子に腰掛け、だらしなく姿勢を崩す。

「そろそろ帰るか？もう時間も結構経ってるぞ」

店内の掛け時計を探し、時間を確認してみる。夕方6時半か。

時間を星奈に伝えると、星奈は「うーん・・・」と悩んだ挙句、
「後一個だけ」と言い俺の手を引く。

「これ、これやる。・・・ダメかな？」

「えっと・・・」

星奈が指差すそれは、・・・プリクラだった。

何故プリクラ？こういうのって、仲のいい友達（同性）だったり、恋人同士が撮るもんなんじゃないの？

星奈の考えている事がわからない。それはいつもの事なのだが、今回もまたいつもの様にからかわれているのだろうか？

星奈を見る。星奈の表情は、いたって真剣だった。が、それもつかの間。

急に申し訳無さそうな表情になり、

「・・・や、やっぱ、ダメだよねっ。男の子ってこういうの結構恥ずかしかったりするもんねっ」

帰ろうか、と星奈は出口へと向かう。その後姿は何だか寂しそう
で、俺は声をかけずにはいらなかった。

「い、いいよ。俺、こういうの初めてだし、経験してみたいしさ。
日頃お世話になってるんだし、これ位の我儘きいてやらないとな！」

一言『いいよ』と言うだけのつもりだったが、思わず心中を吐露
してしまった。我ながら恥ずかしい。

振り向く星奈。まさかいいよと言われるなんて思っていなかった
のか、動揺した面持ちだった。

「え？い、いいの・・・？無理してない？嫌々撮るとか、嫌だかね」

星奈の表情が険しくなる。鋭くなった眼光に、俺は一瞬怯んでしまった。だが、嘘はついていない。

「無理なんかしてないって。プリクラ撮ってみたいってのも本当。いーから撮ろうぜ？」

今度は逆に俺の方から星奈の手を引く。が、勢いを殺しきれず「きゃっ」と小さく声を上げながら、星奈が俺の胸に飛び込んで来る。「はぶっ・・・」

はたから見れば、抱き合っている様な構図。照れ隠しにしても、ちよつと強すぎたか。

「わ、わりい・・・」

思わず謝る俺。星奈はちよつと恥ずかしそうにはにかんで、

「ははっ、そこまであたしとプリクラ撮りたいのかよー！しょうがないなーっ。さ、早く中入ろ！」

そう言っ、いつもの調子で繋いだままの手を引っ張り、「カット専用」と書かれた台の中へ入る。

その文字を見て、俺は初めて意識した。

周りから見ると、俺と星奈は恋人同士に見えるのだろうか。

ま、まあ・・・、プリクラなんて他の台もきつと同じ様なもんだけ。

そう自分に言い聞かせ、俺は星奈に続き中へと入った。

フレーム選びや文字の挿入など、やたらと時間がかかったがどうにかプリクラを撮り終える事が出来た。

俺は先にも言ったようにゲームセンターに来る事自体が初めてなので、プリクラなんか撮った事もなく、終始星奈に任せっきりだったのだが、当の本人もあまり慣れていなかったのか、思うように進まなかった。

「いやー、実はあたしもプリクラなんて初めてだったんだよねー」。

だからどこをどうしていいのかあまり良くわからなくってさ。ごめんごめん！」

星奈はにこやかに謝ってくる。毎度の如く謝られている感じがしないが、今回は特に悪い気もなかった。

てかこいつ、プリクラ撮んの初めてだったのか……。つまり俺とが初めて。

「良かったのか？初めてのプリクラが俺となんて。他の友達とか、これから出来る彼氏とかの方が良かったんじゃないの？」

俺はつい聞いてしまう。何故わざわざ俺と自分でも撮った事のないプリクラなんか、やったんだろう。

何か意味があるようなないような……。考えすぎか？

星奈は外の取り出し口から出来上がったプリクラを取り、それを眺めつつ口を開いた。

「別に、誰でもいいじゃん。そんなの。てか何？くわっちはあたと、そういった関係をご所望なのかなー？」

「んなワケ、ねーだろ……。」

歯切れの悪い返事になってしまった。

いつもならここは、全力で否定する所なのだが。今回はそれが出来なかった。

何故だろう。別に星奈とそういう関係にまで発展させる気は無いのだが。葵にも聞かれる度、全力で否定しているし。

もしかしたら、俺は心の奥底で、少し意識しているのかもしれない。

「ほほお……。もしかして脈アリ？」

星奈が追求してくる。やめてくれ、自分でも良くわからないんだから。

「ねえっつの」

そこで俺は星奈を見て、不覚にもドキッとさせられた。

だってコイツ、俺と写ったプリクラなんか見て、物凄い笑顔なんだもん。

大事そうに両手で抱え、まるで大切な人から貰ったプレゼントかのようにそれを眺めていた。

自然と口元に浮かぶ笑み。そんな顔されると、こっちも撮って良かったと思う。

そのまましばらく眺めると、星奈は近くにあったハサミでプリクラの半分を切り取り、それを俺に手渡す。

「はい、くわっちの分。それをあたしと思って、大事にしてやってくれ！」

照れ隠しだろうか。星奈は執拗にそれを俺に押し付けてくる。

「わかったから！曲がる曲がる！」

「ご、ごめん・・・」

はにかむ星奈。

「んじゃ、時間も遅いし。帰ろっか！」

そう言って星奈は俺を置いて、一人で店から出て行く。

「待てよ」と俺は受け取ったプリクラを財布に入れ、後を追う。

俺と星奈は、家の方向が一緒の為、自然と帰り道も一緒になる。

だが、二人の間に会話は無い。

こっちからは、変に意識してしまい何を話しかけたらいいかわからないし、星奈は何も言わないし。

かといって不穏な空気が流れるでもなく、その無言はいたって自然なものだった。

俺はちよつと我慢できそうにないが。

そこで星奈が口を開く。

「学校、楽しい？」

こちらに目を合わせる事なく、淡々と聞いてきた。

「ああ、おかげさまでな。中々楽しいよ。少なくとも、今までよりはずつつとな」

俺は本心を口にする。実際コイツには、かなり感謝している。

転校してきてまだ2週間も経っていないのに、こんなにも気にか

けてくれる奴なんて他にいるだろうか。

そこで俺は、ふと思った事を聞いてみる。

「星奈はさ、何で俺をそんなに気にかけてくれるんだ？まだ知り合
って日も浅いし、別にどこかが突出して良いと言っ訳でもないのに」
それは前々から気になっていた事だ。最初こそ迷惑がっていたが、
最近はそれは全て俺の為にやってくれているんだって事がわかった
からだ。

実際、周りとも少しずつ打ち解けてきているし。それも全部、星
奈がキツカケを作ってくれたお陰だ。

「別に？あたしはただ、話しかけただけ。それに対してくわっちが
行動を起こしてただけでしょ？」

さも当たり前のように、星奈は言う。

「じゃああたしからも聞くけどさ、どうしてくわっちはこんな、自
分で言うのもアレなんだけどさ。こんな馴れ馴れしい奴とつるんで
るの？」

今度は逆に星奈が聞き返してきた。俺が星奈を受け入れた事は、
本人からしても以外だったのだろうか。

「そりやお前、気が合うから、なんじゃねーの？」

そっけなく答える俺。こんな言うだけでも、結構恥ずかしいん
だな。

すると星奈は「ははっ」と軽快に笑い、

「そっか、あたしもきつと、そんな感じだと思うよ？」

星奈は流し目で俺を見つめてきた。暗くて良く見えないが、頬が
少し紅潮しているように見えた。

「はは、同じか」

「そそ、同じだね」

ははは、と二人で顔を合わせて笑っていると、俺の家が見えてき
た。

もうそんなに歩いたのか。人といると時間が経つのもって早いもん
だな。

俺は歩みを止める。星奈もそれに合わせ、俺と向き合う様にして立つ。

「んじゃ、俺ん家ここだから・・・って、もう知ってっか」

うちの妹　葵に変な誤解をされたあの日以来、こいつは懲りる事無く、ちよくちよく朝に玄関先まで迎えにきてたりする。

もちろん毎日ではないが。

「しょっちゅう来てるからねー。葵ちゃんは元気？」

星奈は俺ん家を見上げながら言う。

「ああ、元気だよ。てかマジ、これ以上葵に誤解されたくないから、って今更遅いけど・・・。迎えに来るなどは言わないから、今度からは家の前まで着たら携帯にメールくれ。俺起きてるから」

俺が星奈にそう頼むと、星奈は口と尖らせ、

「えー、あたしだって葵ちゃんに会いたいよー？いいじゃん誤解なんてさ、その内これが当たり前になつてくるんだから」

そう言つて、星奈は俺に背を向ける。そしてこう続けた。

「まあ、いいや！くわっちがそう言うんなら、今度からはメールにするよ。その代わりちゃんと起きてないと、部屋まで乗り込んでうからね？」

いやいや、やめてくれ。頼むから。

俺は今後一日たりとも、学校のある日は寝坊できないのか・・・とげんなりしながら「ああ、わかったよ」と言う。

「あー、言っただな？覚えてるよー。あたし、有言実行するタイプだから」

星奈はニヒヒと笑い、再び俺の方へ振り返る。

「それじゃ、また妹さんに誤解されてもあれだし、あたしは帰るね。また明日、学校で！」

そう言い、星奈は俺に敬礼する。

「おう、今日はありがとな。楽しかったよ」

「いやいや、こちらこそ楽しかったよ。それよりあのプリクラ、オカズにしちゃダメだかね？」

腰に手を当て、ジト目で俺を見つめる星奈。誰がするか！

「あのな・・・」

俺が呆れ顔で返答に困っていると、星奈は口を尖らせた。

「なーんだよー。ノリ悪いなあー。そういう時は冗談の一つや二つ言つもんだよーもう。ノリの改善は次会う時までの課題だね！ははっ頑張れー」

そう言つて星奈は、踵を返す。次会うのって明日なんだけどな・・・。

その後ろ姿を眺めつつ、俺は手を振り、

「改善できるかどうかは分からないけど・・・、また明日！」

星奈は振り向かず片手を上げて反応する。

角を曲がり、星奈の姿が見えなくなった所で、俺は帰宅した。

誕生日とプレゼント

「おかえり」

俺が玄関の扉を開けると、そこに葵が待ち受けていた。

葵はジーっと俺を見つめている。な、何だよ……。

「今、水落さんと一緒だったでしょ」

「何で知ってやがる!？」

こいつ怖い!あの日誤解されてからこいつ怖い!

「覗き穴、から、見てた。お兄ちゃん遅いから心配だなーって」

遅いといっても、まだ7時過ぎたあたりなのだが、葵は葵で俺の事心配してくれたんだな。

覗き穴から覗いてたっていうのは、ちよつと怖いけど。

「そつか。悪いな、心配させちまって」と悪びれる俺。

すると葵は無表情で淡々と、「電話しても出ないし、メールしても返事が来ないから、凄く心配したんだよ?」

なんかこいつ、ちよつとおかしくないか?いやおかしいだろ。顔が怖い、気がする。

てか、電話もメールも着てたか?と、俺は携帯を確認してみる。

画面を開くとそこには、着信18件。新着メール24件。留守番電話17件。といった普通ではない数の表示があった。

日付を見てみる。9月12日だった。

そつえば……と、俺は血の気が引くのを感じた。

そこで葵が口を開く。

「今日、何の日か……さ。覚えてる?懐かしいなー、去年の今頃は皆でさ、テレビ見ながら食休みしてたよねー」

こいつ俺の心配ではなく、俺がちゃんと時間までに戻ってくるかを心配してたのか。

「お、おお……。もちろん、覚えてるぞ?なんつったって、俺は

お前の、兄貴だもんな・・・？」

これはヤバイ。葵は猫に関してもそうだが、家族間の行事等に関しても、物凄く感情的になる。

「そうだよな、お兄ちゃんだもんね。お兄ちゃんは、あたしの、お兄ちゃん。大事な妹の、しかもこんなに大事な日を忘れるわけ、ないもんね？」

今日が何の日だったか、特別に教えてやろう。今日はだな・・・、

「あたしの誕生日、忘れるわけが、ないもんね？」

すみません、忘れてました。

「もちろんさっ！忘れるわけがないだろう、こんな可愛い妹の誕生日を！！」

何言つてやがる！素直に謝れよこの馬鹿！と自分が無意識に口にしてしまった言葉を後悔する俺。

すると葵は、もの凄くいい笑顔（とにかくいい笑顔）を浮かべ、

「だよねっ！良かったあ。あたしはもしかしたら、万に一つもしかしたらお兄ちゃん忘れてるんじゃないかと思つて・・・。お兄ちゃん、少しでも疑っちゃったあたしを、許してね？」

許すも何も、俺・・・、忘れてたし・・・。

俺は表情がひきつるのをなんとか抑え、葵を避け部屋へ戻ろうとする。

が、葵は俺の前へ立ちはだかる。ダメだ、逃げられない・・・。

「疑っちゃったあたしも悪いけどさ、何の連絡も無しに遅くなったお兄ちゃんもいけないと思うんだ？」

葵は淡々と語る。ダメだ、言い訳が思いつかない。

「きつと、何かさ、訳があるんでしょ？」

やっぱりさつき素直に謝っておけば良かった・・・！

と言つても、言つてしまったものはしょうがない。俺は必死に弁解を試みる。

「へ？え、えーつとあ・・・、訳？訳ねえ・・・。あー、うん。さつき、どの辺りからさ、見てたの？覗き穴から」

まず自分のターンを開始するには、ドロ―をしなくてはならない。だが、今引くカードによつては、俺はこのゲームに敗北してしまう。つまり、山札の最後の1枚を令、引く所だ。

引いたカードによつては一発逆転で勝利できるかもしれない。その確立は五分五分だ。

さ―て、最後の一枚は・・・。

「ずっと覗いてたから。左側からお兄ちゃんと水落さんがフェードインしてきたよ。何か楽しそうだったね」

「すみませんでしたあああああああ！！！」

どうやら俺の山札は、葵によつて操作されていたらしい。

いきなり土下座し叫んだ俺を見て、葵は特にびっくりした様子もなく、淡々と、

「どうしたの？いきなり謝つて。別にお兄ちゃんは悪くないってば。だって妹の誕生日にですら遅刻しなければならぬ理由が、お兄ちゃんにはあつたんだから。そうでしょ？」

こいつ、この後に及んで・・・もういつそ、殺してくれ・・・！！

とか言つたら本当に殺されそうな気がするから言えんが。

「あ、いやー・・・。あのな？」

俺は立ち上がり、今更ながらに言い訳を探す・・・ダメだ。視点が定まらない。怖い、怖いよ！

お前の誕生日なんかすっかり忘れて、俺は出会つてまだ2週間たつてない女とゲーセンでいちやいちゃ楽しく遊んでました！

とか絶対に言えない。彼女だつたりすれば話は別なんだろうが（どうだろう）あの日以来俺は『星奈彼女説』を全力で否定し続けた。今になつて後悔する。別に、彼女説を否定する事自体間違つていた訳ではないんだが・・・。

嘘でも彼女と言つておけば、まだ俺はこの後の展開に光を見出せただろう。

そうやって俺がグズグズしていると、葵はとうとう表情を陰しく

し、

「ねえ、聞いてるんだけど？訳があるならある、無いなら無いで、はつきりしてよ」

葵は怒気を孕んだ、しかし静かな口調で催促してきた。

「えっと、訳は・・・あるような、無いような。その・・・」

一向に覚悟の決まらない俺は、尚も返答を躊躇う。そんな事すれば、葵の機嫌を損ねるのは分かりきっているというのに。

案の定、葵は一気に表情を怒りに染め、怒鳴り散らす。

「何！？何なの？？そんなに水落さんと遊んでたっていうのがあたしに言い辛い訳！？確かに誕生日忘れて遊んでたっていうのは酷いし言い辛いのもわかるけど、あたしも流石に素直に言ってくれれば許すよ！そこまで子供じゃない！！でも何、お兄ちゃんその態度・・・！そういう風にされると、あたしも腹たつんだけど！あたしはお兄ちゃんの妹で、女じゃない！もしかしてお兄ちゃんは今まであたしにそういう風に接してきたの？あー気持ち悪い！あたしはあなたと近親相姦する気は毛頭ありませんから！勘違いすんな！死ね！！」

ブチギレた葵は、周りも気にせず罵倒を浴びせ続ける。ここまで感情を露骨に出されたのは、今日が初めてかもしれない。

でもさ、ここまでブチギレてるって事は、そういう意識してたのはそっちの方なんじゃないのか？と俺は思う。

それに少し言い過ぎな気が。いくら俺が悪いとはいえ、ここまで言われて黙っていられる程俺は優しくない。

「おい・・・！！」

流石に俺もキレてしまい、葵を睨みつけドスの効いた声音で呼びつける。

「な、何・・・よ・・・！！」

するとさっきまでの威勢の良さはどこへ行ったのか。葵は涙目で怯える様にして一步、後ずさる。

「何じゃねえ！！俺もお前にそこまで言われる筋合い、毛頭ねえん

だよ！何なんだよ、たかが誕生日1日忘れただけで、他全部ちゃんと祝ってやっただろうがよ！子供じゃないんだつたら、んなつまらねえ事気にしてんじゃねーよクソガキ！てかどんだけ兄貴大好きなんだよお前。それこそ気持ちわりーだろ？あ？母さんと父さんに祝ってもらって、そこに俺が帰ってくる。それで丸く収まったじゃねーか。それをこんな形で台無しにしてよ！てかよ、何だ。ここまでするって事はさ、近親相姦ってのも、お前が一番意識してんじゃねーの？はっ！俺にもんな事する気さらさらねーんだよバーカ！！」俺は言った。言ってしまった。後先考えず、思った事を全て。

葵を見る。葵はまるでこの世の終わりを見ていたかの様な、顔は血の気が引き青ざめ、口はパクパクしているだけで、言葉を発するには至らず、足は棒立ち。手を握る力すらないのか、腕はプラインと真下へ垂れている。

俺はそこで思った。何故両親は、リビングにいろはずの両親は、こんな騒いでいるにも関わらず出てこないのかと。

俺はリビングへ続く扉へ目をやった。明かりが消えている。

もしやと思い、足元へも視線を向ける。うちでは、靴は脱いだら下駄箱へという決まりがあり、普段全ての靴は下駄箱へ収まっているのだが、父親の靴は使用頻度が高いからと出しっぱなしにしている事が多い。

そこに父親の靴は無かった。

念を入れて下駄箱の中も確認してみる。そこには、父親の靴どころか母親の靴すら見当たらなかった。

そこで葵を見る。

「あっ……」

葵は声もなく、手で顔を覆う事もなく、ただ呆然と立ち尽くし、泣いていた。

泣いていた、というよりは、目の前の事が受け入れられず、呆然としていた所に自然と涙が流れてきた。といった方が正しいだろうか。

俺も、今考えると迂闊だった。最初玄関に父親の靴が無い時点で気づくべきだったのだ。

星奈と楽しく遊んだ事で舞い上がっていたのか。リビングへ目を向けなかったのもいけなかった。

こいつは・・・葵は、家族が誰もいない中一人で、料理を準備しケーキも用意し、今日この日に唯一祝える俺を、一人で待っていたのか。

何てことをしてしまった、と後悔するも時すでに遅し。

葵はその場でよろめき、ぺたん、と床に腰を落としてしまう。言葉は発しない。発せないのだろうか。

俺は、両親がこの日この場にいない理由を聞く事にした。満足な回答が返ってくるかはわからないが、父親はともかく母親がいない事に関しては、どうしてもわからなかった。

うちは両親共に働いているが、母親はパートだ。自分の都合に合わせて休む事は可能なはずだ。

「・・・なあ？どうして、誰も、・・・いないんだ？」

俺は恐る恐る聞いた。

本当は話しかけたくない。ここに穴があれば、埋められたい。ブラックホールがあるのなら俺は喜んで自ら体を線にするというのに。

「・・・仕事」

葵は消え入りそうな声で、きつとどんな鉱石より重いであろう、その口を開いた。

「お母さんは、今日、ほんとに休みだったんだけど、向こうの手違いで、ぐすつ……。人がいないから来てくれって……。無理に頼まれて……」

11時半の閉店まで帰ってこれない、と葵は言った。

そこで突然、堤防が決壊したかのように、葵は泣き始めた。大声で。

「別に仕事ならしょうがないよ……。用事があったのかもしれないよ！！でも、あんなのって無いよ！あたしも怒っちゃったし・

・、人の事言えないけど！もうヤダ、ヤダヤダ嫌あ！！」

子供の様に泣き喚く葵。

だが、気持ちわかる。俺も同じ状況でいたとしたら、こんな風・
・にはならないが、気持ちは同じだろう。

「あ、葵・・・」

どう声をかけたらいいか、わからない。てかこんな状況でかけられる言葉なんて、存在するのか？

そこで葵は顔を上げる。散々泣いたせいで、顔はグチャグチャ。

眉間にシワを寄せ、眉をハの字にし、

「ごめんね！！お兄ちゃん折角水落さんと遊んで楽しかったのに、あたしみたいな馬鹿のせいでそれが台無しになって！本当にごめんね！！・・・顔も見たくない！！！」

葵は、もう自分が何をしているのか、何を言ったらいいのか、何を言っているのかすらわからないといった様子でそう言つと、踵を返し階段を駆け上ろうとする。

「ま、・・・待てよ！！！」

俺はそれを、手を引っ張る事で制する。土足で廊下に立つのも躊躇わず。

葵は階段を２段程登っていたので、下から引っ張る形となり、バランスを崩して俺の胸へと飛び込んでくる。

「やだ！！・・・離してよ！離してっ！！！」

「誰が離すか！落ち着けてっ！！！」

俺は葵の背中へ手を回し、抱きしめる。一瞬その背中小ささに、その細さに戸惑ったが、気にせずギュツと力を込める。

「お、お兄ちゃん・・・？」

葵は俺の腕の中で混乱してしまっている。密着しているので身動きは取れず、力一杯抱きしめているので真下へ抜ける事もできない。「本当、ごめんな。俺、父さんとはかく母さんまでいないなんて思っただけで、いや、思っただけでもさっきの言い過ぎた」

俺はもう一度「ごめん」と呟くと、背中へと回した腕により一層

力を込める。謝罪している間、逃がさない為だ。他意はない。

「お、おいしいひゃ・・・、くうひい・・・!」

「わ、悪い」

ちよつと強すぎたか。俺はそつと腕の力を緩める。すると葵はバツと顔を上げ、何度か深呼吸する。顔が真っ赤だ。

「何なの・・・。さっきは気持ち悪いとか、そんな気さらさらねえ、とか言っておきながら。実はあるんじゃないの? 変態」

葵は俺と視線は合わせず、シャツにプリントされた文字を見つめながらそう言った。

確かにこんな事された方からしてみれば、俺は変態かもしれないが、兄妹ならこの位のスキンシップ、当たり前だろ?

もう一度言うが、俺達兄妹の仲は良い。長年各地を転々とし、ちやんとした友達も出来ない中(葵には出来ているのだが)、互いは互いに支えあつて生きてきた。・・・と俺は思つてゐる。葵がどうかは知らないが。

そんな大事な妹がこんな事になっていて、しかもそれは少なからずとも自分に非があるのだと認めてしまったら、もう放っておけないだろ。

すると葵は顔を上げ、まだ赤く腫れた瞳で俺を見る。

「ねえ・・・、もう落ち着いたからさ、いい加減離してよ。恥ずかしい」

そう言うつと、何とか俺の腕の中から出ようと暴れだす。

「落ち着いたか?」

「だから、落ち着いたつて、言つてんでしょ・・・」

俺はその返事を聞くと、腕の力を抜き葵を開放した。すかさずバツと俺から離れる葵。そんなに嫌だったのか?

俺と一定間隔距離を置き、立ちすくむ葵。顔は俯いていて、耳は真っ赤に上気している。

お互い無言の時間。お互いどう言つたらいいのか、わからないのだろう。少なくとも俺にはさっぱりわからん。

落ち着かないといけないのは俺だったのだろうか。いくら兄妹間のスキンシップと言えど、思春期の妹を無理やり抱きしめるなんて行為は、今考えると普通じゃなかったかもしれない。

お互い言葉を発しないまま、時間が過ぎる。立ち位置は変わらず、重心を変えるのですら億劫に感じる。

そんな空気の中、先に口を開いたのは葵だった。

「さっき言った事、全部・・・本心なの？」

上目遣いで俺を見つめながら、気まずそうに聞く葵。

そんな事聞かれてもな・・・。さっきは俺も頭に血が昇ってたし。実際何て言ったのか、良く覚えていない。

俺は返答に困ってしまう。さっき口にしてしまった言葉を何とか思い出そうと、思考を巡らす。

ただ覚えているのは、酷い事を最悪のタイミングで言ってしまったという事。それだけだ。

もちろんそれが本心な訳は無い。だとしても、ここで適当な返事をする訳にはいかない、と俺は思った。

考える俺。すると葵はしびれを切らしたのか、再び口を開く。

「あたしは、さっき言った事・・・全部本心なんかじゃ無いよ。気持ち悪いなんて、1度だっと思ってしまった事無いよ」

ただ意地を張って、怒りで頭に血が昇ってつい言ってしまった。と葵は言った。

「死んじゃ、嫌だよ・・・？死んで欲しくなんか無いよ？」

再び目に涙を浮かべる葵。おいおい、別にそこまで間に受けねえって。

「おいおい、落ち着けて。お前、今まで『死ね』って言われて素直に死んだ奴、見た事あんのか？」

俺は優しく微笑みかける。すると葵もつられて微笑む。だけには留まらず、可笑しくなってしまったのか、笑い始める。

「はははっ！何言ってるんだろあたし・・・あははっ！そっだよね、お兄ちゃんがどんな馬鹿でも、それはないよねえ！」

泣いてグチャグチャな顔のまま、笑う葵。細められた目から零れた涙は、頬を伝い、滴り、服を濡らした。

俺もつられて笑ってしまう。さっきまでの暗い雰囲気はどこへ行ってしまったのか。今は欠片も見当たらなかった。

そして笑いつかれたのか、葵は手の甲で涙を拭くと、

「ご飯、もう作ってあるから。今から温めるから待ってて」と、リビングへと向かった。

俺もそれに続く。何か手伝える事は無いかと、一緒に台所までやってきた。

「なんかあれば、手伝うけど？」

「いーよ、お兄ちゃんは座って待ってて。どうせカレーとサラダだけなんだから、何もする事なんてないってば」

と、葵は俺の提案を却下し、台所から押しやる。

葵の指示に従い、大人しく席に着く俺。せめてご飯だけでもよそわせてくれないかなあ・・・、手持ち無沙汰で辛いんだけど。

と、そこで気づく。今日は葵の誕生日だ。

俺は誕生日プレゼントなる物を、全く用意していなかった。

だがプレゼント位なら、今度あげるから待っててとか言っとけば許してくれそうだな。

もう山場は越えた訳だし。大丈夫だろ。

俺がその問題を事故解決し満足していると、葵が二人分のカレーを持ってやってきた。

「はい、これ。お兄ちゃん分。サラダも今持ってくるからちよつと待ってて」

やたらと量の多いカレーが目の前に置かれる。うん、美味そうな匂いだ。

ぶっちゃけ母親の作るカレーより、葵の作るカレーの方が、俺は好きだ。

母親のカレーは、もはや作り過ぎて飽きてしまったのだろう。何も手付かずの状態、デフォルトの味のまま出てくる。

だが葵は、色々と手を加えて出す事が多い。と言うか毎回か。甘かったり、辛かったり。濃厚だったり、まるやかだったり。

使っているカレールーは毎回同じはずなのだが、ここまで差が出るのはやはり作り手の拘りだろう。

俺はそんな拘りを持った葵の作る料理が、好きだった。まだ発展途上でたまに失敗したりもするが、それもまたそれで美味しかったりする。こいつは将来どんな嫁になるんだろう。兄の俺からしても、楽しみだった。

その葵は、冷蔵庫からサラダの入ったボールを取り出し、テーブルに置き、取り皿に具材を均等に盛り付けていた。

「これ、お兄ちゃんの分ね」と手渡された取り皿には、レタスにトマト、ゆで卵と細かく切り刻まれたハム、それらがマヨネーズと市販のフレンチドレッシングで和えられたタマゴサラダが山盛りに乗せられていた。

これが母親に初めて教わった物らしいが、こんなシンプルな物でも、味の差は歴然だった。

何をどう手を加えたらここまで変わるのか、という位に。

「おう、ありがとう」

俺は取り皿を受け取り、手前に置く。そして「いただきます」と合掌し、食事を始める。

「やっぱ葵の作る飯はうまいな。母さんも見習えばいいのに」

俺は飯を食いつつそう言う。

「何度も聞くけどそのセリフ。褒め言葉なの？ だったらもつと他にレパートリー無いの？ 聞き飽きたよお」

葵は不満そうに言った。いや褒め言葉でもあるんだが、何だろう。自然と口にしてしまうのだった。

「ああ、わりーな。今度なんか別なの考えとくよ」

俺はテキトーに流し、黙々と食事を進める。

完食は、あつという間だった。だって美味いんだもん。

だがカレーもサラダも、思ったより量があったので、おかわりす

るには至らなかった。と言つか、おかわりさせない為にわざわざ計算して盛りつけたらしい。だから自分でやりたかったのか。・・・
　　ただ把握してやがる。

そんな感じで満腹の俺は、椅子でぐったり食休みしていると、
「お兄ちゃん、誕生日プレゼントって・・・」

忘れてたし、無いよね？と葵が尋ねてきた。やばい、その事忘れてた・・・。

全く学習能力の無い自分に絶望した俺は、恐る恐る葵の方へ目を向ける。すると葵は、

「いいよ、別に。忘れてたんだししょうがないよ」

と、予想外の反応を見せた。おお、本当に子供じゃないな。

「別にそんなの今度他の日に買ってもらえば・・・いや」

そこで葵は、唇に指を当て何やら考え事をし始めた。

・・・嫌な予感がする。

「ねね、さっき答え聞きそびれちゃったんだけどさ、あの言葉、本心から言ったの？違うの？」

葵は宙を眺め、考え事をしながら尋ねてきた。

「ああ、本心じゃないよ。俺も血が昇っちゃってさ、見境無くなつてつい言っちゃった事だし、気にすんな」

俺は軽く返す。すると葵は目を細め「そっか」と呟く。何やらこ機嫌だな、どうしたんだ？

「じゃあ、誕生日プレゼント決まったよ」

「・・・え？何々、言ってみるよ」

俺はさっきの質問とプレゼントの関連性が見出せず、つい促してしまつた。

「えつとね、・・・その」

口籠る葵。何だ、どんな高いもん買わせるつもりなんだこいつは。場合によってはバイトしなくちゃならないかもしれないな。

俺がそんな事を考えていると、葵は意を決し、とんでもない事を口走った。

「キス・・・してよ。誕生日チュー」

「ゲフツ・・・ゲホツゴホツ・・・お、お前え!？」

当の本人は、頬を赤らめ目を閉じ、「んーっ」と顔を近づけてきていた。んーっ、じゃねえ!んーっ、じゃあ!

俺は口に含んだ麦茶を全てコップの中に吐き出してしまふ。ふちから漏れた麦茶が首元をビチョビチョに濡らしてしまっていた。

葵は片目を開けこちらの様子を伺うと、再び目を閉じ「んんーっ」と顔を近づけてくる。

何なんだ?こいつは俺に、何を求めてるんだ?キス?いやいや、それはないだろ。だって俺達、兄妹だぜ?

俺は混乱してしまっていた。いや、してもおかしくはないだろ?だって妹が、兄に、キスしてだなんて。正気の沙汰じゃないね。でも冗談なら冗談でそろそろ終いにしてもいい頃合いだ。なんだよ、結局怒ってるじゃんか。そんなに俺を困らせたいのか・・・。

俺は葵の奇行に対し、未だに何の反応も示せないでいた。どうすりゃいいんだよ。

そんな俺にしびれを切らした葵は「チッ」と舌打ちをし、パンツとテーブルに手を突き、立ち上がる。

そのまま俺の元へ近づいてきた。何をする気だ。

「お、おい?どうした?今日のお前は、何だか・・・変だぞ?」

俺の問いに答えず、葵は俺の両肩をガシツと掴む。

「誕生日忘れてあんな言葉浴びせて、そんであたしは料理作ってあげて、拳句プレゼントまで忘れてたんだから、これ位してくれたっていいでしょ!？」

そう言っただけで葵は顔を近づけてきた。吐息がかかる程顔を近づけた葵は、眉間にシワを寄せ、

「このプレゼントで、全部許してあげる。さっきのは全部、嘘偽りだったんでしょ?・・・、だったらいいじゃん」

そう軽く言うがな・・・。世間に知れてみる、顔あげて歩けなくなるぞ・・・。

俺は自分達の世間体を考え抵抗を試みるも、葵の肩を掴む力は意外と強く、しかも体重をかけてきているので簡単には振りほどけなかった。

後頭部へ腕が回された。葵は膝を俺の太ももの上へ乗せ足場にすると、顔を少し斜めに傾げ、再び目を閉じゆつくりと、顔を近づけてくる。

俺は今まで、妹の事、葵の事をそんな風に意識した事なんてなかったのだが、今この状況で初めて意識してしまった。

今言葉を紡いだ唇は薄く、けれど艶があり、意識してしまっているからかもしれないが、艶かしくも感じられた。

ここまで接近して初めて、薄く化粧をしている事に気がついた。そして、以外に整った顔立ちをしている事にも。

鼓動が早くなるのを感じた。何故？相手は妹だぞ？そう自分に言い聞かせるも、体が言う事を聞かなかった。

顔と顔、唇と唇が近づく。葵の吐息が口に、鼻にかかる。少し力レーの香りがしたが、それも葵の甘ったるい香りにかき消され、気にはならなかった。

もうこうなったら、なるようになれ！と、俺は抵抗するのをやめた。本当はやめるべきではないのだろうが、何故かやめてしまった。俺も覚悟を決め、両目を瞑る。そして、唇と唇が触れ合う、まさにその瞬間だった。

「ただいまー。葵ー？永治ー？お父さんはまだ、帰ってきてないわよねー？」

バツ、と俺から離れ距離を取る葵。胸に両腕を当て、荒い呼吸を整えようとしている。

俺は俺で、覚悟していた分複雑な気持ちだった。

「葵ー？永治ー？いないのー？」と、母親がリビングへ入ってきた。「いるんじゃない。・・・何どうしたの？二人して汗びっしょり。」

葵！あんた顔真っ赤じゃない、風邪でも引いたの？」

母親の言葉で初めて気がついたが、葵だけではなく俺までも、異

常な量の汗をかいていた。

こんな感覚、生まれて初めて感じたものだから、上手く言葉に表せないが……。

母親の問いに、葵は泣きそうな声で……というかもはや泣きそうな表情で、

「う、ううん……、大丈夫だよ……。え？なんで、お母さん……、閉店まで帰ってこれないって……」

そうだ。俺は直接聞いた訳ではないが、葵は確かに11時半の閉店まで帰ってこれない、と言っていた。

それを聞いた母親は、俺達の気持ちなんざ気にもせずに、

「それがねえ！今日が何の日かってのを一生懸命に説明したら、『じゃあ八時まででいいよ』って！言ってくれたのよお！」

今の時刻は八時二十分。退勤して帰ってきて、丁度か。

「へ、ははっ……。そう、なんだ……。ははっ……」

葵はまるで魂が抜けてしまったかのように、顔に生氣はなくなってきたまでの紅潮はどこへ行ったのか、青白い顔をしていた。

「何、感動し過ぎちゃって何も言えないのー？もうっ葵ったら可愛いんだからー！！」

そう言って母親は葵を抱きしめる。葵はされるがままにされていた。もはや自分で立つ気力すらないのか、母親を支えにしてようやく立っていられるみたいだ。

葵の様子を変に思ったのか、母親は背中に回した腕を離す。すると葵はペタンと床にへたり込んでしまう。

「どうしたの葵、あんた元気ないわよ？」

流石に母親も様子がおかしい事に気づく。遅くね？てか、アンタのせいだかんね？

しばらくそのままだった葵も、「……。もう……。やだぁ……。あああー！！」

両手で顔を覆い泣き出してしまった。母親も状況が飲み込めず、どうしたらいいか分からずあたふたしている。

そこで俺を見て、

「永治アンタ・・・、一体葵に何したの！！場合によっちゃあ勘当だよ！？」

と怒鳴りつけてきた。え？俺なの？

流石にちよつとイラツと来た。「知らねーよ」と返すと、俺は席を立ちリビングを後にした。

後ろからは未だに葵の鳴き声が聞こえ、母親のなだめる声も一緒に聞こえてくる。

俺が言うのもアレだけどさ、最低な誕生日だよな。

結局何もしてもらえず、唯一自分が望んだプレゼントも、母親のおかげで台無しになるし。

まあ、こんな事になっちまったら、今更俺が何してもどうにもならないからな。

俺は葵に心の底から同情し、部屋へと戻るのであった。

翌朝。

いつもの様に制服に着替え、朝食を採る為に一階へ降りる俺。

部屋を出た所でまたもや葵と出くわした。

・・・何なんだ、このきまずさは・・・。

だが葵はいつもの様に「おはよう」と挨拶してきた。

只今回はいつもとはちよつと違い、こちらに振り向きちゃんと俺の目を見て、笑顔で。そして返事を待たずに行く事もなく、その場で返事を待っている。

「・・・お、おはよう」

出来ればしばらく関わりたくないというのが俺の本心なのだが、こんなんされたら返さない訳にも行かず・・・。

すると葵が口を開く。

「ねえ？昨日もらえなかったプレゼント、今もらっても、いい？」
恥ずかしそうに、聞いてきた。いい？と言われても、昨日のアレ

は完全にそういう流れだったし・・・。

「え、えっと・・・」

返答に困ってしまう。昨日の今日なので、どう答えたらいいものか、全くわからない。

「うん、わかった」

「・・・、何が？」

思わず聞き返す。何がわかったんだか、俺にはさっぱりわからない。

葵は二度三度うんうん、と頷くと、

「お兄ちゃんの決心がつくまで、これは保留にしておいてあげる。別にあたしはプレゼント、貰えればいいからさ。お兄ちゃんが我慢できなくなるその日まで、あたしもプレゼント我慢してあげる」

葵はそう言っていると、クルツと半回転し、勢い良く階段を駆けて行った。

俺はその姿を見送りながら、葵の言葉の意味を考える。

俺が我慢できなくなるまで？という意味だ？俺が妹にキスしたくてたまらなくなるって事か？

「んな事、ありえねーだろ」

俺は小さく鼻で笑い、葵に続いて階段を下りていった。

あの場所で

気まずい空気の中朝食を摂り終えた俺は（父親は昨日の件に全く関与していないので、いつも通りだった）、星奈からメールが来ていたので少し早めに家を出た。その行為が葵にどう取られるかと少し危惧したが、その心配をよそに「いつてらー」、「行って来ます」といつも通りのやりとりをする俺達だった。

そんないつも通りに振舞う俺だが、昨日の出来事について、葵について、どうしても考えてしまう。

そして、一瞬だとしても実の妹相手に意識してしまった事に、なんとも言えない罪悪感を感じてしまう。

2つしか離れていないとはいえ血の繋がった兄妹だ。エロいとか考えた時点で、アウトだろ。

でもまあ今更考えてもどうにもならない。過ぎてしまった事だ。

俺は星奈のテンションについていく為、気持ちを切り替え待ち合わせ場所へと向かった。

星奈が指定した待ち合わせ場所は、この間香織と気まずいまま別れたあの十字路だ。

俺がまだ少し眠たい目を擦りながらその場所へ向かうと、星奈は待ちくたびれたといった感じで扉に背中を預け、立っていた。

今日は香織も一緒だった。珍しい。

「お、おはよう」

「おっはー！てか遅いぞー？くわっち」

「あ、おはよう。桑島君」

俺に続き星奈、香織が挨拶を返す。遅いと言われても、メールを送信した時点で星奈はもうこの場所へ着いていたのだから、遅れてしまうのは不可抗力だろう。

その心境と、昨日の事件のせい、か、歯切れの悪い挨拶になってし

まった。

だが二人は気にした様子もなく、

「ま、いつか！さー行こ行こっ」

と前を向き歩き始める。香織と俺もそれに続き、歩き始めた。

そこからはいつもの様に、星奈がちょっかいを出し、それに対する俺の反応を見て、香織が笑い、三人で喋る。俺と香織は決して一つの線で結ばれる事はなく、全て星奈を介して繋がっていた。

そろそろ香織とも、星奈との様に普通に喋り合える関係になりたいな。と、俺は思っていた。

別に今のサイクルに不満があるわけではない。むしろありがたいと思っている。香織は、俺と星奈の絡みを見て反応を示している。それについては、俺がリアクションをするからではなく、星奈が俺にちょっかいを出すからそれに便乗している部分がほとんどだろう。この二人は付き合いが長いみたいだからな。という事はお互いに気が合うのだろう。

お互いどういった意図でその言葉を言うのか、大体わかっているのだと思う。だから反応し易いんだろ。

星奈とは気が合つと、向こうがどう思っているかは知らないが、俺はそう思っている。てか星奈も気が合つからこうやって絡んできているのだろう。

出会って2週間足らずでこの関係は、俺的にも・・・多分誰から見ても上出来だとは思うのだが、こう恵まれた環境に慣れてしまうとその人にとってはそれが普通になってしまい、更に上を求めてしまう。人間って欲張りな生き物だからな。

俺もその例に漏れず、欲張りになってしまっていた。星奈だけに留まらず、香織とも仲良くなりたいたい。

まあそれは、出会った時から思っていた事なのだが。

今までは思うだけで行動には至っていなかったが（成り行きで一度あったが）、今日は星奈もいて雰囲気も良いしと、俺はちよっただけ勇気を出して香織に話しかけてみる事にした。

「そついや彩瀬さ」

まだ星奈の様に名前で呼び合える程、経験地は積んでいない。

香織はと言うと、いきなり話しかけられた事に戸惑いを隠せず、かといってぞんざいに扱う事もできず、「ん？え？何々？」と困りつつも返してくれる。

「学校終わった後とかさ、休日とかって、何してんの？」

聞いてどうなる。と言われたら何も言えない。けど何か共通の話題があるかと言われれば、何も無い。お互いの事、ほとんど知らないのだから。0から1は生み出せないだろ？

だから最初はこんな感じでいいんだ、と自分に言い聞かせる。

香織は、あごに手をやり「んー」と少し考えて、口を開く。

「あたしは帰宅部だから、そのまままっすぐ家に帰って、家事とか手伝ってるかな。バイトもしてないし」

香織は宙を見据えたまま、俺と目を合わせる事なく続ける。

「うちお父さんがいないからさ。お母さん毎日頑張ってお仕事して疲れてるから。本当はバイトして少しでもお金入れてあげたいんだけど、『お母さん大丈夫だから、香織は勉強頑張るなさい』って言うてくれて。でも何もしないのは申し訳ないから、せめて家の事だけでもつて。ご飯作ったり洗濯したり掃除したり、猫の世話したり……。結構大変なんだけど、お母さんの為だし何より将来必ずやる様になる事だから、今のうちやつといて損はないかなーって。一石二鳥でしょ？」

そこで俺と目を合わせ、ニコツとはにかむ香織。なんて健気でいい娘なんだ……。お母さんも幸せだろうな。

俺もその内お母さんの様に、香織に家の事頼める日が来るといいな。なんて事を考えながら、

「そつか……。大変なんだな」と無難な返事をした。

「桑島君は、普段どんな事してるの？」

今度は香織が尋ねてきた。「俺は……」と、香織にならって宙を見つめつつ考えていると、星奈がこちらをジッと見つめている事

に気がついた。

星奈は嬉しそうな、そうではないような。複雑な表情をしていた。そして俺と目が合うと、すねたように鼻をならし、そっぽを向いてしまった。

そういえばこいつ、俺と香織が話し始めてからまだ一言も発してないな。

案外自分が中心でなくなると、機嫌を損ねるタイプなのかもしれない。

俺は星奈のまた少し違った面を見て少しだけ、嬉しく思った。

「俺は、最近は学校終わったら星奈に連れ回されてるよ。色んなところね。それ以外の日とかは・・・、家でのんびりしたり、勉強したりして、平凡に過ごしてるよ」

そう言っただけ俺は香織を見る。彼女は淡く笑って、

「ははっ、ほんとに仲良いんだ」

まるで昔を懐かしむかのように、遠くを見て、そう言った。

それ以降、会話は発展する事も無く終わってしまったが、初めてまともに喋れた・・・！と、俺的に大満足な結果だった。

星奈が少しムスツとしてるのが、ちょっと気になるが。何かしたかな俺？

香織は気付いていないのか気にしていないのか、その件に関しては無関心だった。

「・・・んで・・・いの？」

星奈がボソツと何か呟いた気がした。

その日、星奈は会話こそするが、いつものキレというか何と云うか、なんとなく違う気がした。

調子でも悪いのだろうか。それとも朝の不機嫌と何か関係があったりするのかな？と言っただけの不機嫌の理由すら俺には分からないのだが。

「星奈？」

俺は放課後の、皆が帰り支度をしている中、何か用事でもあるの
だろうか急いでいる星奈を呼び止めた。

「何？くわっち。あたしこれから部活なんだけど」

星奈はエナメルバッグを肩に下げ、腰に手を当てて俺に振り向く。
おいおい普段は必要以上に構って来るくせに、今日はそっけないな。
俺はその星奈の態度に不満を感じ、前を向きそそくさと去ってし
まう星奈を追いかけ肩を掴む。

「ちよつと待てって。何でそんな機嫌悪いんだよ？俺何かしたか？」
肩を掴んだ腕を見て、迷惑そうに振り向く星奈。相当不機嫌なん
だな。

「ナニソレ？何であたしがくわっちのした事で腹立てなきゃ、いけ
ないの？自惚れないでよね」

そう言つて星奈は俺の腕を振りほどき、足早にその場を去って行
った。

俺はこの展開に納得がいかず、けれど追いかける事もできずただ、
その場で考え、立ち尽くす事しかできなかった。

俺・・・何かしただろ？だとしたら俺は一体何をしたんだ？？

一向に答えは見つからず、俺は諦めて家に帰る事にした。

「おかえり、永治」

自宅の、玄関のドアを開けると、待っていたかのように葵が出迎
えた。

・・・今、なんつった？

「おい、もっかい。もう一回言ってみ？今なんつった」

俺は聞き返す。聞き間違えでなければ今葵は俺の事、下の名前で
呼んだような？まあ聞き間違えだろうが。

「？おかえり、永治？」

ん？おかしい。こいつは俺の事「永治」なんて呼ばないはずだ。
記憶にある限りずっと「お兄ちゃん」と呼ばれていたはずだ。

「もつか「うつさい！黙れ！死ね！！もう近づくな出てけこのクソ兄貴！！」ガスッ！

「いでえ！？テメこの・・・何しやがる？！」

俺の言葉を遮り、葵はいきなりキレた。そして俺の脛を蹴り飛ばすと、俺の言葉を見殺し涙目で階段を駆け上り、こちらへ振り返る事もなく思い切り自室のドアを閉めた。

俺もあまりの痛さに涙目になってしまふ。素足ならともかく、スリッパで蹴るか・・・普通。

「何なんだよ・・・、一体」

俺が一体何をした？そんな疑問を抱えながらも、このまま家にいてもリラックス出来そうに無いと思い、俺は荷物を置き再び外に出る事にした。

・・・散歩でもするか。

気温も以前に比べ少し下がり、季節の変わり目を感じさせる涼しげな空気の中、俺は行くあてもなく彷徨うのだった。

「・・・つってもどこ行こうかなあ。ここら辺、まだ全く知らないもんな俺・・・」

ふと頭の中に星奈の顔が浮かぶ。こんな時あいつがいたらなあ・・・と、邪険にされたにも関わらず思ってしまう。

今頃部活に励んでいるのだろう、とユニフォームに身を包んだ星奈を思い浮かべながら歩いていると、いつも集合場所になっている十字路までやってきた。

そう言えば、香織の家つてここを左に曲がるんだっけ。

気付けば俺はその道を進んでいた。

「・・・ん、なんだかここら辺、見覚えがあるぞ？」

俺は歩いていてふと、この道に見覚えがある事に気がついた。いつだっけな・・・。つい最近だよな・・・、あ。

「そっか、あの子猫捨てた時か」

だからか、と俺は一人で納得すると、以前子猫を置き去りにした空き地へとやってきた。

あの時は人の視線を感じたのだが・・・、

「気のせいだったんだろうな。実際誰もいなかったし」

空き地に、ダンボールは見当たらなかった。無事誰かに拾われたか、そのまま死んで処理されたか。

関心の無い事について考えるのはつまらない。時間の無駄と悟った俺は、空き地を後にする。が、

「・・・、桑島君？」

背後から聞き覚えのある声が聞こえた。振り向くと、そこには私服姿の香織がいた。

「お、おう。彩瀬か。どうした？こんな所で」

俺は香織の突然の登場に戸惑ってしまい、わかりきった事を聞いてしまう。

「え？何でって、あたしの家そこだし・・・。偶々買い物に行こうかなって思ってたなら桑島君がいたから、声かけてみたの」

と、香織は空き地のすぐ隣。2階建ての一軒家を指差す。え？香織の家って、ここだったのか。

思いもよらぬ情報提供に喜んでしまう俺。その内遊びとか来れたらしいなーなんて。

てか香織とこうして星奈抜きで会えるなんて、絶対運命じゃね？てか私服姿の香織たんも可愛い！

などと浮かれている俺を不思議そうに眺めていた香織は、当然誰もが抱くであろう疑問を投げかけてきた。

「それで、桑島君は何でこんな所にいるの？」

小首を傾げる香織。何でってそりゃ、運命だからに決まってるだろ！と怒鳴ってやりたかったが、折角のチャンスを棒に振る訳にもいかないのですでのとこで我慢した俺。偉い！

「ああ・・・散歩してたら、偶々。この間、つつつてもまだ学校始まる前にだけ、一回ここら辺来た事があったからさ。自然と足が動いてた？みたいな。運命、かな？」

我慢出来なかった。でも言うてすぐさま後悔した。何やってんだ

俺！馬鹿！！

案の定香織は、「・・・はぁ」と困惑してしまっていた。当然だよな。他人同然の男に「運命、かな？」なんて言われたら、誰だつてそうなるよな。わかってたよ。

「そうなんだ・・・でもどうしてわざわざ、こんな何も無い所まで来たの？駅の方に行ったほうが絶対いいと思うけど」

困惑気味の香織は、必死に頭の中を整理して会話を続ける。こんな意味分らない奴に時間割いてくれるなんて、どこまで優しい娘なんだ君は・・・。

そこで俺は、何か違和感の様なものを感じた。何故だろう。

俺はあごへ手をやり、考える。違和感？なんだ、いつもと違う・・・。そうか。

香織はいつも俺と喋るのを躊躇う傾向にあったのに、何故か今日は自分から会話を繋げて来ている。そこに違和感を感じたんだ。

なんだ、全然いい事じゃないか。今朝勇気を振り絞って話しかけてよかった。その所為で星奈は不機嫌になってしまったけど。

俺は、もう答えは出た、とその事についてそれ以上深くは考えずに、

「いや、実はこの間この場所にさ、子猫を捨てたん」その話もっと詳しく聞かせてくれる？」

香織は俺の言葉を遮ると、手にぶら下げていたエコバッグを地面へ置き、俺に近づいて来た。

ん？なんか展開がおかしくないか？

俺は急接近してきた香織に怖気づいてしまい、一歩後ずさる。それに合わせて、香織も一歩近づく。

「ねえ、その話の続き、聞かせてよ。『この場所に子猫を捨てただけださ』、何？」

香織の表情がどんどん険しくなっていく。怖い。普段の香織からは感じられない何かが、今の香織からは感じられた。

何故香織はここまで怒ってしまったのだろう？少し前に、猫を好

きだと言っていた気はする。だがここまで怒るか？普通。

だって、誰にだって家の事情はあるし、それによって猫を捨てる人なんて、世の中探したら五万といるだろ。大体俺はその件については被害者だ。葵が子猫なんか拾ってきた所為で地理も良くわからない土地で人気の無い所を探し回り、拳句の果てには帰りに道に迷って夕食は抜きにされるし。

その時の回想が頭を過ぎり、今の香織の意味不明さも相まって、俺は苛立ちを覚えた。

そしてぶつけてしまった。

「おい！ちよつと待てつて、綾瀬！！」

執拗に迫る香織の肩を掴み、どうにか距離を置く俺。しかし香織はその腕を乱暴に振り払い、

「黙りなさい！話を聞かせて！早く！！」

更に怒りの色を濃くする香織。今度は振り払った腕を掴み、身体が触れ合うか合わないかといった距離まで接近し、同じ人とは思えない、恐ろしい形相で俺を睨みつけてくる。

力一杯握られた腕には少し伸びた爪が食い込み、鋭い痛みが走る。力を入れすぎている所為か、元々色白な香織の手は、更に白みを増していた。

「痛っ・・・、つてえな！？一体何なんだよ、彩瀬？！俺が何したって言うんだよ？ただ猫捨てただけだろーが！！」

何でそんな怒ってんだよ、と口にする前に、顔面に衝撃が走った。バチンッ

香織の渾身の平手打ちが、俺の顔面に繰り出された。

ビリビリ・・・といった、痒いような痺れたような感覚が、頬に残る。

クリーンヒットした為、脳が若干揺れ、視界がぼやける。少し曖昧な意識の中、俺は必死に香織を睨みつけた。

「・・・てめえ、痛えな・・・、何すんだよ、おい・・・！！」

俺はもう後の事は考えず、自分の中に芽生えた感情をそのまま吐

き出す。どんなに好意を寄せている相手でも、お近づきになりたいと思っけていても、自分の非が認められないままこんな仕打ちをされ平気でいられる程、俺は大人じゃない。

今度は俺が、未だに爪を食い込ませ握っている香織の手を、無理矢理引き剥がす。そしてそのまま握り、乱暴に引つ張る。香織は抵抗こそするが、男の力に適うはずもなく、引き寄せられる。

「・・・何！？離さないよ、くっ・・・離して!!」

俺から離れようと、髪が乱れるのも構わず抵抗し、暴れる香織。

だが力の差は歴然で、振りほどくには至らなかった。

「誰が離すか。どうしてこんなにしたのか理由聞くまで、離さねえからな・・・!」

そう言って俺は、先の香織の様に腕に力を込める。絶対逃がさない様に。香織は鈍痛に顔を歪ませ、開閉もままならない己の腕を見て、恨めしそうな表情で俺を見上げた。

直後、下半身に形容し難い、強いて言うならこの世の終わりの様な、凄まじい痛みが走った。

「あぐう・・・ぐう」

金的攻撃だ。

俺は咄嗟に香織の腕を放し、股間を押さえて地面に倒れこむ。立っていられない。死んでしまうのではないかという位の激しい痛みが俺の股間から込み上げてくる。

「ッ!!」

声にならない叫び声を上げながら地面をのた打ち回る俺を、香織はゴミでも見ているかのような冷めた視線で見下し、

「この最低野郎ッ！二度と話かけるな近づくな顔も見せん！そこでそのまま死んでろクズ野郎!!」

そして香織は無様に転げまわる俺を視界から消すと、地面に置いたままのエコバッグを雑に拾い上げ、足早に空き地を去って行った。俺が再び立てる様になったのは、それから30分程経った後だった。

それから、下腹部を押さえながらジャンプを繰り返し、道を通る人達に奇異の視線を向けられる中やっとの思いで冷静さを取り戻した俺は、もの凄い後悔の念に苛まれていた。

別に、さっき俺が香織に対して取った行動に、後悔している訳ではない。てかむしろ、ああいう反応するのが普通だろ？

俺が後悔しているのは、もっと前の出来事についてだ。何故、この場所に猫を捨ててしまったんだろう、といった、もう過ぎてしまったどうしようもない事についてだ。

女々しい男だ、と思う人もいるかもしれないが、俺からしたら「もう過ぎた事」なんていう風に簡単に終わらす事は出来ない。

第一俺は被害者だ。本来なら拾ってきた張本人の葵がこの役を買って出るべきなのに、何で俺が・・・。

俺がその事でうじうじ思い悩んでいると、携帯が鳴った。葵からだった。

「もしもし？」

俺は諸悪の根源である（だと思っている）葵からの電話に、不機嫌そうに出た。

『あ、もしもしお兄ちゃん？・・・まだ怒ってる？だよねぇ・・・、そのさ』

ごめんね、と葵は言った。軽く。俺の心境も知らずに。

『ちよつと、いきなり呼び捨てなんて無理があつたよね。ははっ、今度はちゃんと順を追って「永治お兄ちゃん」って呼ぶから、よろし』

ブツッ

俺は無意識の内に通話を切ってしまった。再度葵から電話がかかってくるも、出る気にはならなかった。

いっその事、着信拒否にでもしてやろうか。

俺は憎憎しく携帯の画面を眺め、そんな事を思っているのだった。

「大体誰の所為でこんな事になってると思ってるんだよ、あの馬鹿」
俺は見当違いだとわかりつつ、それを必死に自分の中で正当化し
毒づくのだった。

妹

その日の帰り道、俺はとても暗かった。

どの位暗かったかと言うと、望遠鏡で覗く月面の、クレーターの最奥と同じくらい。言いすぎか。

とにかく暗かった。顔だけに留まらず、俺の半径一メートルに縦線でも浮かんでいるんじゃないかという位、暗かった。

そろそろくどそうだから、やめておこう。

俺は今、自宅玄関の前にボーツと突っ立っている。時刻は深夜一時半。辺りは俺と同じくらい暗かった。

でも、こんな時間になっても。葵はきつと玄関先で俺の帰りを待っているのだろう。

泣きながら。しかもそれは、俺の見当違いな八つ当たりによるものだ。

どんな顔して迎えられればいい？

ただでさえ、香織にビンタされて、絶交めいた発言されて、かといって星奈に相談する事もできず（昨日の朝、不機嫌だったから）、一人でうだうだ考えに考え抜いて、結果こんな有様になっているというのに。

そこで更に妹の泣き顔を見て、そして何も悪い事をした訳でもないのに必死に謝られる？・・・無理だね。

そんな事なら、いつそ死んだ方が・・・。あ、そうだ。死のう。

俺は思いつくとすぐさま行動に移す・・・訳が無かった。

視界がいきなり暗転し、とうの昔に死んだはずのおじいちゃんとおばあちゃんが、俺の大好きだった自家製おはぎを両手に抱え微笑んでくることも、無かった。

俺は呆然と立ち尽くす。どの位の時間が経ったのだろう。あと2時間程すれば葵も諦めて就寝すると思うのだが。

携帯を開き時刻を確認する。 1時32分。・・・時間が経つのが遅すぎる。

俺が時間という概念を生み出した、というかそんな人いるのだろうか？存在すらはつきりしない、そんな曖昧な人物を頭の中で勝手に想像し文句を濁流の様に吐き出していると、

「・・・お兄、ちゃん・・・？」

葵が玄関のドアを開け、顔を出してきた。案の定目は真っ赤に腫れていた。

俺はこの2週間という短い間に、何回妹を泣かせてきただろう。全てが俺に非があつたという訳ではないが、こうして何度も妹の泣き顔を見ると、俺は何してんだ・・・といった気持ちにさせられる。

しかも今回は、完全に俺が悪い。葵は何もしていない。しかもあんな些細な事の為に、謝ってくれたのだ。

俺は言わなければならない。葵が口を開く前に。その口が紡ぐ言葉はすでにわかりきっているから。

だが口が動かない。腹に力が入らない。まるで喉の奥に、栓をされたみたいだ。

何を言ったらいい？どう謝ったらいい。俺は無数にあるその言葉、6文字、あるいは4文字、7文字。数は無数に在れど意味は全て共通している単純明快なその言葉を、どうして言えない。

葵の唇が揺れた。つい先日俺を求めてきたその唇が、俺が先に言わなければならない言葉を、紡ぎだそうとしていた。

ここで先に言わなければ、葵に先を越されてしまったら、もう今まで通りの兄妹ではいられない様な気がした。

俺は葵の言葉に流され、謝るタイミングを見失って。互いが互いに距離を置くようになってしまっ、そんな気がした。

焦燥感。気付けば俺は「待て！」と葵の口を手で塞いでいた。

葵は元々大きい目を更に大きく見開き、「もご・・・？むご！？」と俺の突然の行動に対しパニックを起こしていた。

「待て、言つな！・・・それは俺が言わなきゃいけない事なんだよ」
「ふえ？」とやっと俺の手から逃れた葵は、俺の言葉を全く理解していない様だった。

そして俺は葵と距離を置き、姿勢を正す。腰を90度に折り、
「悪かった。許してくれ」

素直に謝った。

俺はしばらくそのまま腰を折り地面を見つめる。

理解が出来なかったのだろう、葵はしばらく無言のまま、頭を下げる俺をボーッと見つめていた。

「・・・・・・、え？何で？何で・・・・お兄ちゃんは謝ってるの？」
やっと口を開いた葵は、俺が想定していたのとはほぼ同じ返答をしてきた。・・・・だろうな。

そこで俺は顔を上げる。葵の顔を真つ直ぐ見据えて、真実を話す。
「葵、ごめんな。お前は何も悪くない。ただ・・・・あの時は色々あつて。別に俺は葵に対して何も怒ったりとか、してないから。あれはただ、俺の自分勝手な八つ当たりだったんだ」

俺の話を未だ理解できていないのか黙って聞く葵。涙を拭う事も、鼻をすすする事もせずただ呆然と俺の話を聞いていた。そして、

「え・・・・えええ！？何だよおー・・・・。あたし、お兄ちゃん怒っちゃったと思つてすつこい・・・・物凄く心配したんだからあー！！」

と表情を崩し、再び泣き始める葵。だが今回は先ほどの様に悲しげなものではなく、安堵した為か自然と流れてきた涙だった。

「本当、ごめんな」と俺は再び謝る。ポケットからハンカチを取り出し、顔を拭つてやる。

「いいよあ、自分でやるからあ・・・・」

葵は俺の手からハンカチをそつと奪うと、鼻をかみはじめた。おい！

「大丈夫だよ。これ、貰うから」

「返すつもりはないのか・・・・」

泣き顔ながらにニコツと微笑む葵を見て、俺はようやく安堵でき

た。

良かった。星奈と香織で留まらず、更に葵とまで距離を置かれてしまつたら俺は多分生きていけない。

我ながら情けないと思うが。本当に良かった。

俺は濡れた顔をハンカチで拭っている葵の頭を撫で、「そろそろ、戻ろうか」と促す。

「ちよつと待つて」

そんな俺を葵が制した。何だ、まだ何かあつたか？

俺は困惑気味ながらも歩みを一旦止め、葵へ顔を向ける。すると、「プレゼント、強制的に貰っちゃうから」

葵は足りない背丈を背伸びと俺の首へ抱きつく事で補い、唇を重ねてきた。

一瞬の出来事だったので、俺は成す術も無く・・・ファーストキスを妹に、奪われた。

生まれて初めての、その形容しがたい感覚に俺は戸惑い、抵抗するも葵に思い切り脛を蹴られ、怯んでしまった。

葵の吐息は熱く、口の隙間から口内へ侵入してくる。キスの味はなんとかと言うが、味なんて全く感じなかった。

自分の中で、時が止まる。真夜中の静寂の中、五月蠅い位に脈打つ二人の鼓動だけが意識して認識する事が出来た。

どの位の時間が経つたのだろう。俺の唇を未だ貪る葵は、終始目を閉じ唇のみを動かす。

吐息と共に声が漏れる。首に巻きつけられた腕には更に力が込められ、身体と身体が密着する。

遠くで車のクラクションが聞こえ、俺は我に返る。

誰かに見られてはマズい！？と俺は周囲を確認したかったが、首へ巻かれた腕の力は思ったより強く、加えて眼前には葵の顔がある為上手く周囲を見渡す事が出来なかった。

角度をつけ強引に重ねられた唇は更に強く、深く押し付けられてくる。

葵の顔や髪から漂ってくるほのかに甘ったるい香りは、俺の理性を殺すには十分過ぎる凶器だった。

もうどうなっても知らねえぞ・・・！！

俺は諦め、もう流れに身を任せようと思った。申し訳程度の抵抗を止め、葵を受け入れようと背中へ腕を回す。

すると丁度同じタイミングで、散々吸い付いてきた葵の唇が離れ、俺の腕をくぐる様に後ずさり距離を取った。

そしてゆっくりと深呼吸をする。長く長く、肺の隅々にまで空気を送り込みそれを勢い良く吐き出す。

葵はうつとりと笑みを浮かべ、

「・・・今日は、この位でいっか！」

許してあげる、と言った。俺はあまりの落差に状況が把握できず、ただ呆然としていた。

葵を抱きしめるべく上げた両腕が未だそのままだった事に気が付き、慌てて戻す。

それを葵はニヤツとしつつ眺め、

「お兄ちゃんも満更じゃなかったでしょ？どうだった？あたしとのチューは」

「は？」

ちよつと待つてくれ。全然全くこれっぽっちもわからん。どうだった？・・・知るか。

俺が裏返ってしまった声で返すと、葵は三日月の如く目を細め、笑った。

「ははっ、わかんないよねえ。あたしもぜんっぜん！わかんない！！」

葵はいきなり大声で叫びだした。コラ、今何時だと思ってる！気でも触れたのかと少し心配になった。

そして大きく伸びをして一息ついた葵は、急に真剣な表情になり、尋ねてきた。

「でも、嫌じゃなかったんでしょ？」

そう聞かれ俺は、その時の事を思い出そうとしたが、ついさっきの事のはずなのに、ほとんど覚えていなかった。

その時は物を考える余裕等なく、ただ口先にブニブニした感触がどーだの、そこから熱い吐息が口の中へ流れ込んできただの、そんな事位しか記憶に残っていなかったが、少なくとも嫌悪感は抱いてはいなかったと思う。

「少なくとも・・・嫌では無かった。・・・かな？」

そうを伝えると、俺は急に羞恥心がこみ上げ、そっぽを向く。顔が熱い、外が真っ暗で良かった・・・。

すると葵は「そっか」と頷くと、こちらを見ないまま横を通り過ぎ玄関へ向かう。

そしてドアノブへ手をかけ振り返り、満面の笑みで

「このシスコン！！」

そう言っ て勢い良くドアを閉めた。

外泊

結局その日、俺は朝まで眠れなかった。

理由はもちろん、昨日（正確には今日）の葵の行動について、ずっと考えていたからだ。

実の兄妹のはずだし、それに今まで葵はそんなそぶりは一切見せなかった。

ここに引越してきて、一体何が葵を変えたのだろうか。学校で虐めでも受けているのだろうか。

考えたくも無かった。学校で泣かされ、更には家でも兄に泣かされ・・・そのせいで気が触れてキスしてきたなんて。

俺はそれ以上この事について考えるのはやめ、これからの事について考え始めた。

学校へついたら、まず香織に謝ろう。別に俺が何か悪い事をしたとかそういう事ではないのだが、謝っておくことに越した事は無いだろう。

あと、星奈に何故機嫌が悪いのかも問いたさないと。理由は何かしらあるんだろうが、生理とか？だからと言って何も知らないまま不機嫌に接せられるのも、俺としては不愉快だ。

「ああー！やる事がいっぱいだ！！」

俺は大きく伸びをした。両手を上に挙げ、肺の隅々まで空気を送り込み、言葉と一緒に吐き出す。目には少し、涙が滲んだ。

目を指で拭くと、徹夜で疲れ軋む体に鞭打ち、脱ぎ捨てられた制服を身に纏い一階へと降りた。

俺が一階へ降り、リビングのドアを開けると、すでにそこには俺を除いた全員が揃っていた。もちろんその中に葵はいた。

俺は気まずいながらも葵を見ると、葵は俯いたまま箸を口に運ん

でいた。

「やっぱり自分でも昨日のアレは後悔してんのかね？」

俺は自分の中でそう結論付けると「おはよう」と一言。そしてイスに座る。

すると俺の登場にやっと気が付いた母親が、こんな事言ってきた。

「あつ、永治！ちょっと聞きなさい。葵に・・・あなた知ってた！？葵が！」

いいから落ち着いて話してくれ。あと、唾と米粒飛ばすのやめてくれ。昨日の見られたかと思ってドキツとしちゃったじゃないか。

「ねえ、いいから落ち着いてくれる？あと、唾とか米とか飛んできてるんだけど・・・」

俺は母親に諭す。すると母親はやっと落ち着きを取り戻し、

「あらごめんなさい。ていうかこれが落ち着いていられますか！唾もお米も飛ばしてません！」

取り戻せなかった様だ。俺は諦め「はいはい」と適当に流す。

それから中々本題に入ってくれない母親にうんざりした俺は、時計を確認する。まだ時間はあるな。

そこで葵を見た。一瞬目が合ったが、すぐに視線を逸らし葵はまた俯いてしまう。頬が紅潮していた。

俺はご飯の上に、キャベツとツナ缶を炒めた物をぶっかけて、一気に口内へ掻きこむ。そして麦茶を手に取り、

「葵に彼氏が出来たって！つい昨日キスして抱かれそうになったって！！」

口に含んだ所で吐き出した。制服が麦茶とキャベツとツナと咀嚼されグチャグチャになったご飯でビチョビチョのグチャグチャになった。しかも少し鼻に入ったのか、喉の上側の方に変な痛みが走る。だが俺はタオルで拭き取ろうともせず、制服を着替えるでもなく。ただ呆然とするしかなかった。

顔からは血の気が引き、冷や汗がでてきた。それ、俺の事じゃね？何て事をしてくれたんだ！と葵の方を見ると、葵はまるでリラッ

クスした猫の様に（以前葵に写真を見せられた。顔だけは可愛い）目を細め、口角はつり上がっていた。

胸に両手を当てて、葵は微笑んでいた。嬉しそうに。俺の気も知らないで。

でもその顔を見ていると、不思議と怒りの感情は消え失せていた。もうどうにでもなれ。俺は覚悟を決めると、母親へ向き直り、

「ごめん。それ、・・・俺なんだ!!」

「はあ？何言ってるの？アンタな訳無いでしょ、学校のお・と・も・だ・ち。てかそんな汚い格好いつまでしてるつもり？早く洗濯機入れてきてよ。シミになんてしょ!」

怒られた。・・・あれ？

良く状況が読み込めなかった。が、母親は俺の制服の汚れに対し大層お怒りのご様子だったので、てめえの所為だババア!と頭の中で毒づき、「てめえの所為だクソババア!」と言ってリビングを後にした。

二階の自室へ戻り替えの制服（冬服）に着替えた俺は、リビングに顔を出さずにそのまま外へ出た。星奈からメールが来ていたからだ。

もう機嫌は直ったのかな？やっぱり生理？でもそれってそんなに早く終わるもんなのか？・・・と、星奈について思考を巡らしていると携帯にメールが受信された。・・・母親からだった。

内容を確認するとそこには、「永治、もう帰ってこなくていいから」と書かれていた。

俺はそれに対し「わかった」と一言で返信して、携帯を閉じた。返信した後少し後悔したが、漫画喫茶で2〜3泊すれば母親の方から折れてくるだろう。

あとで星奈に漫画喫茶の場所を聞いておこう。そんな事を考えていると、例の待ち合わせ場所に着いた。だが、そこに星奈はいなかった。

「・・・あれ？珍しい事もあるんだな」

俺はそう言つて、星奈へ「もう着いたぞ」とメールする事にした。携帯を開き、送信先を選んでみると、

「くーわえっち!!」

後ろから謎の言葉と共にドンツと何かがぶつかって来た。そして後ろから手を回される。

その衝撃で俺は携帯を地面に落とし、倒れそうになったので足を前に出し支えると、丁度落とした携帯を踏んでしまい・・・。

パキツ・・・と何かが割れる音が聞こえた。

もちろん飛びついてきたのは、星奈だった。

俺は何も言えなかった。ただその場で立ち尽くし、涙腺が熱くなるのを感じるだけだった。

今の一瞬で何が起きたのかは、星奈にも理解できたらしく、まずい事をしてしまった・・・とこちらを申し訳なさそうにして見上げた。

「・・・あはっ。どう、かな？桑島永治を略してくわえっち。今までは名字・・・」

途中で口を止める星奈。そして一瞬、泣きそうな顔になるがすぐに普通に帰り、

「ご、ごめんなさい!!」と謝り、頭を下げ・・・なかった。何故か抱きついてきた。俺は「へ？」と情けない声を上げてしまった。

俺が慌てて肩を掴み、星奈を離すと代わりに今度は腕を掴み、自分の頬に当て、こう言った。

「おわびにほしなのからだ、ぜんぶさわって・・・いいよ?」

俺はそこで我に返り、「ふわあああ!!」と奇声を上げ腕を引き戻した。

寝不足の所為でテンションが変な事になつてゐる。

現に星奈も若干、引き気味だった。くっそ・・・、お前自分で原因作つてその反応は無いだろ・・・!!

辺りを見回すと、中年のサラリーマンがゴホンツと咳払いをして

去って行った。そして、主婦のオバさん達数人がこちらを見て何かヒソヒソと話している。・・・ヤバい。主婦層にかかればこんな事、すぐに噂として広がってしまう。

そんな事を考えあたふたしている俺の後ろを、見知った男子が通り過ぎた。

「この手の噂はすぐに広まるから、気を付けろよ」

その見知った男子は（確か中島君）俺に、そして星奈へ冷たい視線を向けると、それ以上何も言わずに去って行ってしまった。

もう知れてしまったのに、どう気を付けたらいいんだろう？と俺は疑問に思った。

「智志・・・だ・・・、てるの・・・？」

後ろから星奈の呟きが聞こえた。そうだ、彼は中島智志君だ。・・・今度話しかけてみよう。

俺は無残にも真つ二つになった携帯の残骸を拾い鞆へ放り込むと、
「星奈、そろそろ行こうぜ？」

星奈に声を掛け出発を促すが、星奈はなかなか動いてくれなかった。顔色も優れないようだ。

俺は何かあったのか？と心配になり、星奈の元へ駆け寄る。そして俯いた顔を覗き込み「大丈夫か？」と声を掛ける。

すると星奈はシュバツと顔を背け、

「大丈夫だからっ！いい、行こっ！」

と、ズンズンと先へ進んで行ってしまった。

学校に着くや否や、俺は息を止めてしまった。

そこに香織がいたからだ。

当の香織はといえば、俺へ一瞬視線を向けるも、まるでそこに誰もいなかったかの様な立ち振る舞いで星奈にだけ「おはよう」と挨拶し、足早に教室へ向かってしまった。

「・・・何かあった？」

星奈は横目で気まずそうに聞いてくるが、

「いや、何も・・・」

何かあったしそれは星奈に物凄く相談したい事なのだが、辛い現実を見せ付けられた俺は何も考えられず、つい否定してしまった。

それを聞いた星奈は納得していない様子だったが、「そ、そっかならいいや」と空気を讀んでくれた。

それからというものの、香織はこちらが話しかけても一向に相手にしてくれず、視界にすら入れてもらえなかった。

いつもなら授業中にわからない事があったりした時、香織に聞けば快く教えてくれたのだが、今回はそうも行かず・・・。

「な、なあ・・・彩瀬？ここ、わからないんだけど・・・」

「・・・、そう」

こんな感じだ。そして何回も繰り返していく内に、その一言も無くなり完全な無言で返される様になった。

俺の周りには、いつもみたいな活気は無かった。そしてそのまま放課後に。

香織は俺はもちろん星奈にさえ声を掛けずに、スタスタと下校してしまった。よっぽど機嫌が悪かったのだろう。

その不機嫌の理由が、俺だからなあ・・・。人事ではない。しかも携帯は星奈に折られ、今日は家に帰れない。素直に謝れば良かった。

謝るといえば結局、香織に謝る事も出来なかった。いやさせてもらえなかった、か。それ以前に存在を抹消されてたし。

俺は授業が終わったにも関わらずノートや教科書そのままに頭を抱えて悩んでいると、星奈が声を掛けてきた。

「ねえ！絶対何かあったでしょ！？ちよつと言ってみ！」

セクハラでもした！？と星奈に問い詰められる。誰がするか！俺がそんな奴に見えるのか？

「いや・・・、ちよつとな」

「ちよつと、じゃない！あんなに怒ってる香織見たの、あたしです

「ら初めてだよ!!」

そう言えば香織と星奈は小学生の頃からの付き合いなんだっけ。羨ましいよなあ。俺もこの地で別の家庭に生を受けたかった。

星奈は俺の歯切れの悪い返答にかなりイライラしているようだ。そんな、星奈には関係無いのに・・・。

そこで俺は思い出した。そうだ、俺はこいつに聞かなきゃいけない事があつたんだ。

「なあ、星奈。話変わるんだけどさ」

「何？てか変えんな。その話は香織の事より大切な事なの？」

星奈は呆れながらもそう聞いてくる。まあ、生命に関わる・・・からな。場合によっては。

「大切っていうか、それが解決しなきゃ俺のこれからが無くなるかもしれないから・・・」

俺がそう言つと、星奈は「そ、そう・・・何？」と促してきた。

「ここら辺つて、漫画喫茶とかある？」

「あるけど、何で？それとくわつちのこれからに、何の関係があるの？」

星奈が怪訝そうに聞いてくる。まあ、それだけ聞いたらなんのこっちゃって感じだろうな。

「まあ、しばらく帰る家が無くなってしまったと言うか・・・」

「ふえ!？くわつちんち火事!？」

星奈が大声で叫んだ。いちいちリアクションが大げさな奴だ。やめてくれ、周りの視線が集まる。

「い、いや・・・。火事つて程大層な問題じゃない。今日の朝さ・・・」

・・・と、俺は事情を星奈に説明した。妹の部分を除いて。言えるか（笑）

事情を聞いた星奈は、「なあんだ、そんな事」と、何でもないように返してきた。

「そんなの、帰っちゃえばいいじゃん？大体、そんな事本気で言う

親なんていないよ。誰だって自分の子供は大事なんだからさ」

星奈は俺に諭してきた。違うんだ、うちの母親はそういう事言う時って結構本気なんだよ。

以前にも同じように、帰ってくるな、と言われた時があったのだが、その時は普通に帰った。今の星奈みたく、本気じゃないだろうと。

すると母親は、「帰ってくるなって言ったでしょ？何帰ってきてんの？」そう言って決して玄関の鍵を開けてくれる事はなかった。

その時は夜の大体11時頃か。仕事帰りの親父に家に入れてもらったつけ。その後夫婦で大喧嘩だ。

結局喧嘩では母親が勝ち、父親はあまりでかい顔ができなくなっってしまったのだが。

元々母親にとって俺は、どうでもいい存在の様に感じられてしょうがない。一応家族という形で暮らしているから、少しは気にかけるも、その扱いは葵とは全然違う。

例えば、小学校の頃の授業参観。葵の時は両親揃って参観したが、俺の時は親父だけ。

例えば、小中一貫しての運動会。葵の出る演目では両親そろっての参観。これについては俺も競技に集中していたので存在の確認には至らなかったが、おそらく見ていなかったんだろう。

事後賞賛も葵にだけ。最近はそういったあからさまな差別は目立たないが、小さい頃は弁当の中身に至るまで、歴然の差が目にとつて分かった。

俺が一体何をした……。とその頃は良く憂鬱になっていたっけ……。

と俺が遠い目をして昔の事を懐かしんでいると、

「ねえ！！聞いてんの人の話！！」

気付けば星奈の顔が超至近距離にあった。近い！！

俺は慌てて顔を背けようとして、バランスを崩しイスごと後ろに転倒した。

「だ、大丈夫?!」

慌てて駆け寄る星奈。俺の顔の真横にしゃがみ込む形の星奈。俺は鈍痛に顔を歪めながらも、しゃがむ星奈の足の間から見える青を基調とした下着だけは、しっかりと網膜に焼き付けていた。

その視線に気付いた星奈は慌ててスカートを押さえ、「この変態！人が折角心配してんのに！」と顔を真っ赤にして怒っていた。
「ごめんごめん」

俺は謝りつつ立ち上がり、机の上の荷物を引き出しにしまう。そして筆記用具を鞆の中に収め、集められた視線から逃げるように、「そろそろ帰るか。漫画喫茶の場所、教えてくれよ」

星奈を連れて、教室を後にした。

その帰り道、俺は星奈から漫画喫茶の場所を教えてもらうと、金を下ろすべく銀行へ向かったのだが、そこでとんでもない事実に出いた。

「通帳もカードも家に忘れた・・・」

我ながら馬鹿だった。一応財布の中に金が入っているのだが、これでは一日行けるか行けないか。

シャワー等を借りるとなると、今の所持金では足りなかった。

「馬鹿じゃないの・・・？てか何？何でそんなに家帰りたくないの？なんか理由があるんでしょ？」

ここまで来ても尚、帰宅を頑なに拒否する俺を見て、何かを察した星奈は心配そうに聞いてくる。

そこで俺は、母親の俺に対するぞんざいな扱いについて、一通り話した。

「うーん、それは、母親としては酷いとは思うけど・・・。でも、お金が無くっちゃ不可抗力じゃん？葵ちゃんに頼めば？携帯で連絡いいれて・・・あ」

そこで星奈は、今朝の出来事について思い出したのか、申し訳なさそうな顔になった。おい、忘れるな。

「ごめん、携帯は朝あたしが壊しちゃったんだよね……。はは。・
・葵ちゃんのアドレスとか知ってたら、あたしから連絡入れるけど？」

覚えてるわけがない。

「全部赤外線で登録して、連絡する時とかも全部アドレス帳からやってたから、文字を直接意識して見た事ないから覚えてない」

俺はどうしようも無いこの状況を打開するべく、天を仰ぎ思考を巡らす。すると星奈が、

「じゃ、じゃあ……。さ。あたしの家、とっ泊まる？」

俺は星奈のその言葉に、光速で反応し振り向く。俺のその反応に星奈は少し引いてしまっていたが、

「香織の件についても問い詰めたいし。二人でいれば、それについての解決策も、練れるじゃん？」

星奈は顔を赤くし、俺とは目を合わせずにそう言った。ああ……。やっぱり星奈はいい奴だ。と俺は朝携帯をぶっ壊された件については全面的に許し、返って感謝の念を表した。

「ありがとう……。滅茶苦茶助かる！！……。でもいいのか？俺みたいな奴が上がってたら、両親心配するんじゃないのか？」

俺はその提案をありがたく受け入れる。だが、星奈自身が良くても（どうかは知らんが）両親がそれを許すかどうかと言ったら、分からない。

星奈も俺もお年頃の男女だ。何か間違いがあったら大変だしな。

まあ、俺にその気はない……。とも言い切れないかな！？

そこは言い切れよ、いや無理だ！と俺は自分に自問自答する。が、俺の心配は杞憂に終わったようだ。

「大丈夫だよ。そこら辺はあたしが適当にフォローしておくからさ。てか内の両親、そういうの大歓迎なの。性別問わずにね」

多少おせっかいが来るかも、と星奈は逆に申し訳なさそうになった。

「いやいやそんなの、逆にありがたいよ。こっちは泊めてもらえる

だけでもありがたいし」

俺がそう返すと、星奈は「あはっ、そっか」と笑顔になり、

「じゃあ、コンビニ行って何か買っていこうよ。お菓子とか、飲み物とか」

ATMで金を下ろし、銀行を後にした。

コンビニで飲食物をたんまりと買い込むと、2つに分けられた袋の片方を持つ。

もちろん飲み物が入った方だ。・・・重い。一体何本買ったんだ？俺がお金を出す訳ではなかったので（悪いので少し出したが）、買う物について俺は全く関与しなかった。

チラツと中身を確認してみると、そこにはペットボトルが6本程入っていた。2リットルが。

どうりで重いわけだ、と俺は納得した。

星奈の家は俺の家と同じ方向なので、自ずと自宅前を通る事になってしまうのだが、俺はそれが嫌だったので（葵に会ってしまうかもしれない）遠回りになってしまつて星奈には悪いが、別の道を行く事にした。

「悪いな、わざわざ遠回りさせちまつて」

「いいよいいよー。くわっちだつてそんな重い物持ってくれてるんだから、お互い様！」

謝る俺に星奈はニコツと微笑んだ。ああ・・・、友達つていいもんだな。特に女友達は。

女の友達なんて人生で一回も作つた事が無かつたので、今俺は、とても幸せな気分だった。

しかもその女友達の家は、今からお邪魔するんだぜ！？以前の俺からしたら、考えられない。

お父さんに会つたらどうしようとか、ベランダに下着が干してあつたらどうしようとか、どうしようもない事を考えていると星奈の家らしき物が見えてきた。

「あ、あそこ。あの赤い屋根の一軒家があたしん家」

赤い屋根の、駐車場と庭付きの二階建て。・・・結構デカイ。

星奈は鞆からチェーンに付けられた鍵を取り出し、扉を解錠する。そして扉を開け、

「ささっ、入って入って！狭いけど、気にしないでね」

手招きで促してきた。狭いって・・・、嫌味か？

俺は星奈のその言葉がボケなのか嫌味なのか、気になりつつも聞いた。事はず、「おじやましーす」と控えめな声をあげ星奈宅へお邪魔した。

星奈の家は、やっぱり広かった。

まず玄関から広かった。靴は綺麗に整理整頓され、目視できるゴミは一つも落ちていなかった。

下駄箱の上のスペースには、家族で写った写真や星奈と思われる小さい女の子の写真等が、写真立てに飾られていた。

俺がそれらの写真を凝視していると、「はっ恥ずかしいから見んなゴルア！！」後ろから目を両手で覆われた。

「痛い！痛いって！！指入ってるって！！」

「ごごめん・・・」

慌てて手を離す星奈。だがその体はしっかりと俺と写真立ての間にあった。よっぽど見られたくないのか？良くわからん。

よほど恥ずかしかったのか、顔を真っ赤にした星奈は、「こんな所で立ち話もなんだし！ささ、部屋行こ部屋！」と俺の背中を執拗に押してくる。

「おかえり星奈。誰かいるの・・・、あらあこんにちは」

騒ぎを聞きつけたのか、星奈の母親らしき人物が奥の扉から顔を出した。

「ど、どうもっ、こんにちは！・・・お邪魔してます」

いきなりの登場に俺は驚き、自分で例えるのもなんだが、借りてきた猫の様に大人しくなってしまった。

「あ、おかーさん。ただいま！今日友達泊めてっていいー？」

軽くとんでもない事を言う星奈。確かに今日はそのつもりでお邪魔したのだが、そんなにかるゝい感じで言ってしまったていいのだろうか。俺も一応男なんだが。

いくら両親がそういうの大丈夫だつつつても、少しは心配したりはするだろう。

俺はドキドキしながら、その二人のやりとりを見つめていた。

「あら、いいわよ。なるべく夜更かしはしないようにね」

星奈の母親は軽く承諾すると、俺をつま先から頭の天辺まで舐める様に見渡し、微笑を浮かべると扉の奥へと去って行った。

「さて、許可も得た事だし！あたしの部屋は二階だよーん」

トットット、と星奈は先に階段を駆け上って行ってしまった。

「・・・おう。待てよ」

こんなんでいいのか？と疑問を浮かべつつ、星奈の後を追う俺なのであった。

友達

「ちょっとここで、待ってて！」

星奈は部屋の前へ着くと、そう言つて一人で部屋へ入ってしまった。

何やらガサゴソと物音がするが、それだけでは中の様子を窺い知る事は適わないので、俺は壁にもたれかかり、星奈を待つ事にした。ガサガサッ

ボタン！ゴトツ・・・ピシャッガタン！

・・・パリーン！

「何がどうなってるんだよ！？」

俺は一向に出てこない星奈と、何やら激しさを増してきた物音で心配になり、勝手に扉を開け放ち中を伺う。

そこには、洗濯物に絡まった星奈と、フローリングの床に今落としたのだらう井の破片が散乱していた。

「まっ・・・待っててって言ったでしょ！！何で入ってくるの変態！死ね！」

激昂した星奈は、丁度手に握っていた物を俺に向かって投げつけてきた。

パサッ・・・

「ん？・・・んだ、これ？」

俺は頭部に投げつけられた、恐らく布であろうそれを手に取り眺める。

淡いピンク色で、三角形をしているそれは、伸縮性の良い素材で作られているらしく、大きい穴が一つ。その反対側に少し小さな穴が二つ開いていた。そして少し、湿っていた。

一体何なのだろう、と俺はその布製品をビローンと広げようとすると、

「死ねっ！！」

バゴンッ！

俺の頭部目掛けて星奈は全力で近くに転がっていたバスケットボールを投げつけた。

「痛てて・・・、ちょ、鼻血出てるし・・・」

俺は星奈から手渡されたティッシュを千切り丸めて鼻に突っ込む。鼻の穴がドクドクと脈打ち、時々ピリツとするどい痛みが走る。

「ご、ごめんね・・・。でも、待ってるって言っただのに入ってきて来るくわっちもいけないんだからね！」

星奈はそう言い捨てると、割れた井の破片を怪我に気をつけながら拾い集める。

星奈が部屋の前で俺を待たせたのは、部屋が散らかっているからとかなんとか。そんなの、言ってくれば最初から手伝ったのに。

結局二人で片付ける事になったのだが、色々と制限を付けられた。部屋をジロジロ見ないとか、押入れやタンスには近づかないとか、あっち向けと言ったらあっち向くとか。

一緒に片付ける事に関しても、星奈は未だ納得していない様だった。何がそんなに嫌なのか。

そういえば葵も嫌がってたな。俺の部屋は進んで掃除するくせにおかしいよな。

「いや、別にいいけど・・・。てか星奈、お前もお前で投げるもの選べよ・・・。何で真っ先に昨日穿いてたパンツ投げてくるんだよ」

「次、言ったら殺すから」

星奈は俺の発言を聞くや否や、拾った井の破片の中から一際大きい物を手に取り、俺の喉元に突きつけてきた。

いやそれ、手滑らせたなら大変な事になるから・・・！冗談じゃ済まされないからね！？」

「す、すみませんでした・・・」

俺は背筋が凍りつくのを感じながら、真顔でそう言うのだった。

「自分から手伝うって言ったんだから、もつとせつせと働いてよね」
星奈は井の破片を遠ざけ紙袋の中に戻すと、フンツとそっぽを向き、愛想悪くそう言った。

「ごめん・・・」

何なんだこれは・・・。初お泊りだからもつと楽しい雰囲気だと思ってたのに・・・！いきなり嫌な空気になってしまった。

俺何かした・・・したんだった。さっきの布がパンツだと分かり、しかもそれがつい昨日穿いた物だと分かった瞬間、俺はいやらしい笑みを無意識中に浮かべていたらしい。無意識中なので、自覚は無かったが。

まあ確かに、まだ匂いするかな？！とか、サイズいくつだろう？とか思ってたけど、それを表情に出した覚えは全くないのだが。身体は正直つてのは、こういう事か。

「でも、まあ・・・。俺も思春期だからさ・・・」

「あたしも思春期だよー！」

星奈が声を荒げた。うん、まあそうだよな。

俺は縮こまり、「ですよね・・・」と小声で呟くと、星奈はまたも鼻を鳴らし片付けに没頭した。

俺も星奈にならない、片付けに専念しようとするが、・・・もう何もやる事が無かった。

頼まれた作業が、教科書とノートを纏めて積んでおく、のみだったのではないのだから。

俺は他に何かやる事無いかなどと、部屋を見渡すと

「ジロージローローみーなー・・・！！」

凄い形相で睨みつける星奈と、目が合ってしまった。

「くわっち、後はあたしがやるからさ。てか最初からそのつもりだったんだけど！もつとこう・・・デリカシーとかさ・・・。はあ、じゃあさくわっちは下行ってコップとか、あと取り皿とか持ってきてよ。ついでにこの破片も下持って行って」

星奈はそう言うと、井の破片の入った紙袋を手渡してきた。俺は

それを受け取ると、星奈の視線から逃げる様にして部屋を後にした。
「うーん、女子って難しい」

俺は感想を述べつつ、下へ降りていった。

俺は一階へ降り、リビングに続くと思われる扉を開けると、星奈ママと出くわした。まあ当然か。

「あら桑島君。どうしたの？何か頼まれ事かしら。あの子人使い荒いでしょー。あと部屋も汚かったでしょ？」

星奈ママは、親しげな笑顔を浮かべつつそう話しかけてきた。

「あ、はい。頼まれ事です。部屋は・・・、別にそうは思いませんでしたけど・・・」

俺の部屋の方が倍以上汚いからな。ゴミの日なんか意識してないから、ゴミ袋溜りまくりだし。それもたまに葵が部屋を掃除してくれる時ついに出してくれるのだが。

俺はそう言うと、先ほど手渡された井の破片の入った紙袋を星奈ママに差し出した。

「これ、破片入ってるんで気をつけてください。あと、コップと取り皿を持ってきてくれて言われたんですけど・・・」

俺はリビングを見渡す。やっぱり広い。家具も全てが無駄にでかく、テレビなんかインチが50を越えていそうな位でかかった。

そして日当たりも良く、窓から射す夕焼けの光がリビングを朱色に染めていた。

「いい雰囲気ですね、凄く」

俺は無意識に感想を零してしまう。それを聞いた星奈ママはニコツと微笑み

「あらそう？どこの家もこんな感じだと思っけれど・・・。ありがとう。でも、あたしは桑島君の方が凄いと思っけれどね」

そう言って俺を見る星奈ママ。俺には何のことかさっぱりわからず、無言で返してしまう。

「だって、まだお互い知り合って2週間ちょっとしか経ってない

んでしょう？それなのにここまで発展できるのって、中々無いと思うわよ？」

俺は最初その言葉が嫌味だと思ったが、それは違ったみたいだ。

「あの子、女の子でも男の子でも、あんまり友達いないのよね。それには色々と訳があるんだけど」

「色々って、何ですか？」

俺は野暮だと思いつつ、つい聞いてしまう。だって気になるじゃん。

そんな俺に対して星奈ママは意味有りげに笑い、

「それはあたしの口からは言えないわね。本人から直接教えてもらって。難しいと思うけどね。多分あの子にとってもいい思い出とは思えないから」

そこで星奈ママは苦笑し、「ほら、そろそろ戻った方がいいんじゃない？あの子待ってるわよ」と、会話を終わらせた。

俺は「すみません、失礼します」と一礼し、リビングを後にした。

俺が二階へ戻ると、部屋の前で星奈が待っていた。

「くわっちおっそい！！・・・何話してた？」

星奈はどうやら俺の帰りが遅かったので不機嫌になってしまった様だ。

だったら下まで呼びに来ればいいのに。と俺は思ったが、星奈の不機嫌に気圧され口に出す事は出来ず、無言になってしまう。

「あたしの事？」

再び星奈が問いかけてくる。

「あ、ああ・・・。軽く」

「どこまで？」

執拗に問いかけてくる星奈。何かマズイ事でもあるのだろうか。

「いや、ほんとに軽くだって」

「だからそれがどこまでだっつつてんの！」

眉間にシワを寄せ声を荒げる星奈。俺はその剣幕に怯んでしまい、

その場から逃げ出したくなった。

星奈自身も行き過ぎだと感じたのか、「あつ・・・」と口を噤む。そこでやっと落ち着きを取り戻した星奈は、

「どうせ、友達が少ないからどーのとか、そんな感じなんでしょ？」と今回は落ち着いた声音で聞いてきた。

「ああ、そんな感じ。でも、詳しい事は本人から聞いてくれって、それ以上は何も言ってこなかったよ」

俺は必死に平静を保っていたが、内心泣きそうだった。

どうしてそんなに怒るんだよ・・・。やっぱり漫画喫茶行こうかな・・・。

だが、俺のそんな思いとは裏腹に星奈の表情からは怒りが消え失せていた。

「ならいいや！さっ、部屋は片付いたし、中入ろう」

そう言って星奈は俺の腕を引つ張り、綺麗に片付けられた、先ほどの面影は欠片も無い部屋へと招き入れた。

「適当にそこら辺、座ってて。座布団これ使って」

星奈は俺に向かって青色のシンプルな座布団を放ってきた。俺はそれをキャッチすると、尻の下に敷き、座る。

俺の目の前にはちゃぶ台が置かれ、反対側に星奈は座った。

「さーて。んじゃ、早速香織と何があったのか、聞かせてもらおうとしましょうか？」

「ああ・・・」

早速その話題を切り出すかぁ・・・、と俺は内心ため息をついた。だがまあしょうがないか。星奈からしてみても香織があれだけ怒っている理由には興味があるのだろう。

何せ小学生からの長い付き合いの星奈ですら、香織があれだけ怒っているのを見た事が無いというんだから。

場合によっては、また星奈を怒らせてしまうかもしれないなぁ・・・。親友っていう位だから、そういう部分でも共通している箇所は

あるだろうし。

俺は一度深呼吸をして、切り出した。

「まあ、結論から言うと、俺が香織の家の隣にある空き地で、生後間もない子猫を捨てた事が原因なんだ」

星奈は黙って聞いている。相槌すら打たない星奈は、今一体何を考えているのか、全く把握が出来なかった。

俺は続ける。

「そんで、その事が香織に知れて、キレられて。俺も理不尽に思っ
て反論したら、また更にキレられて・・・って感じ」

「うん、それで？」

先を促す星奈。うーん、これだけなんだけど。

「えっと・・・、それで、・・・まあ、香織の腕を掴んで、ちゃんと聞いてもらうために。理由を話そうとしたら、金玉思いつき蹴られて・・・おい。何で笑ってんだよ」

気付けば星奈は肩をヒクヒクさせていた。顔は俯き、必死に笑いを堪えている。

俺が金玉蹴られた事がそんなに面白いのかよ・・・！こっちは死ぬ程痛かったんだぞ！？

なんとか笑いを堪えた星奈は、再び顔を上げ「くふっ・・・じゃ

あ、次」と更に先を促してきた。

「いや、これだけなんだけど」

「は？」

は？じゃねえ。俺は全部話した。そんな意味分らないみたいな顔しないでくれ、俺だってわからないんだから。

「何、それで香織はあんなに怒ってたの？」

確認する星奈。信じられない、といった表情で身を乗り出してくる。

「そう、だけど。何？何かおかしかった？俺の説明、分かりづらかったらもう一回考えてから話すけど」

でも、今でも全然わかりやすかったとは思うのだが。事実を全

て話したし。

「ちなみに聞くけど、くわっちは何でそこに子猫を捨てたの？」

もつすでに察してくれているとは思うが、念のためにと星奈は聞いてきた。

「そりゃあ家の事情だよ。母親が動物嫌い、家も新築の買ったから、経済的にも・・・って感じかな。ちなみに拾ってきたのは葵ね」それを聞くと、星奈は黙り込んでしまう。何やら考え事をしていく様だが、一体何を考えているのだろう。

「・・・それってさ、ちよつと理不尽過ぎない？だって別に、意地悪して捨てた訳じゃ無いんでしょ？事情あつての事なんだから、それはしょうがないと思うけどな」。あたしはね。あたしには香織がどうしてそんなに怒ってるのか、ちよつと理解できないね」

お、やっぱりどんだけ付き合い長くても、そういう理解出来ない部分つてのは、あるんだな。俺には付き合い長い奴なんて家族以外居たことないからわからないけど。

「だろ？俺も何でそんなに？って、全く理解出来なかったから、困ってるんだよ・・・。何か理由があるならともかく」

「いや、理由があつてもそれは無いでしょ。家の事情なんてあたし達にはどうする事も出来ないだし。まあ、あたしも転校生で、香織とは小5の時から付き合いだから、それ以前に何かあつたのかも知れないけど」

でもくわっちそんなの知らないじゃん？あたしも知らない。と星奈は続けた。

「星奈も知らないんじゃないあ、俺は知りようが無いよな。てかお前、転校生だったのか」

そっかあ、転校生・・・。親近感が沸くなあ。

星奈は俺の言葉に反応する事はなく、黙って考え込んでいる。

そしてしばらく考え込んだ後、「ふむ」と一息ついて再び俺に質問をしてきた。

「くわっちってさ、猫嫌い？」

星奈の意図の分からない質問に、俺は少し戸惑ったが、

「うーん、母親程ではないけど、好きではないかな。嫌いかと聞かれたら、嫌いなんだろうなあ？」

それを聞いた星奈は眉をハの字にして「ああー」と唸ると、

「多分、それだよ。香織が怒った原因」

「え？何で？」

俺は聞き返す。何で、理解が出来ない。

別に俺が何を好こうが嫌おうが、俺の勝手のはずだ。なんで香織が怒る必要があるんだ？

そこで、俺の疑問に応えるべく、星奈が口を開く。

「多分、自分の好きな物を嫌いって言われた挙句にそれを捨てるなんていうずさんな扱いをした事に対して怒ってるんじゃないのかな？ 仮にそうだったとしても、くわっちがそういう扱い受けるのはあたしは納得できないけどね」

なるほど、直接的に俺を嫌ってる訳ではないんだな。・・・でもやっぱ理不尽だろ。

香織って以外と子供だったんだな、と思うと同時に香織の幼稚な怒りの動機に苛立ちを覚えた俺だったが、それでも香織と仲良くしたいし、これからも友達でいてほしいと思った。何せまだお互い何も知らないからな。このまま終わっていうのも何か嫌だった。

そんな俺の心情を察したのか、星奈はこの状況の打開策を提案してきた。

「じゃあさ、こういうのはどう？ 実はくわっちが猫が大好き。でも家庭の事情で飼う訳にもいかず、渋々捨てる事にした。・・・っていう感じ？」

「いい考えだと思うけど、そういう嘘つくのはどうかなあ・・・。しかも俺は以前香織に『俺は猫が嫌いだ』って言っちゃったし。矛盾が出てくるから・・・」

俺は再び、以前の香織との帰り道での事を後悔した。何故あの時「好き」と言わなかったのだろう。

今でもそういった嘘をつく事に抵抗があるのは変わらないが、少なくともあの時「好き」と言っていれば……。

今更してもどうしようもない後悔と、そんなどうしようもなく女々しい自分。ああ、俺はどうしたらいい？

「そんな意地なんか、捨てちゃいなよ。そうすれば、今からでも全然間に合うと思うけど。その時言った『嫌い』って言うのは、家庭の事情が背景にあって、猫を見るとその時の事を思い出して辛いから敢えてそう言った。とかいった感じにすれば、全然大丈夫だよ」「そうは言われてもなあ……。てか星奈さ、よくそんなに案が思いつくな。もしかして、こういうのって得意だったりする？」

俺は星奈に、失礼を承知で聞いた。「嘘、つくの得意なの？」なんて、質問する方もされる方も気持ちの良い事ではない。

案の定星奈は怒ってしまった。

「は？何それ！人が折角考えに考えて、こうして色々言っただけなのに！！何、もしかしてくわつちって馬鹿？頭悪いの？こういう場の空気読めない奴って何やっても最終的に嫌われるから、気を付けた方がいいよ！？覚えときな！！」

そう言っただけ星奈は俺を睨みつけると、フンと鼻を鳴らし顔を背けた。

「ご、ごめん。別に悪い意味は無いんだ、本当に。ただ、さっき星奈のお母さんが言っただけと、何か関係があるのかな？って少し気になって……」

星奈に友達が少ない、というのは少なからずこういった事に原因があるのではないかと俺は思い、気になってしまった。

だからと言って今の場面でそれを質問するのはどうかと、自分でも思うが。口が勝手に動いてしまったというか。しかも俺には関係の無い事で、仮に肯定されてもどうする事も出来ない。

「ごめん……」

俺は場違いな質問で気を悪くしてしまった星奈に謝る。それに対し星奈は、口を尖らせ困った様な表情で、

「まあ、いいや。気になるのはしょうがないし。このタイミングでそれを聞くのは、どうかと思うけど」

何とか許しは頂けた様だが、未だ星奈は不機嫌な表情のままだった。

「で、どうするの？ 今なら、あたしも協力してあげるけど？」

星奈は話を戻す。それについては、まだ俺もどうしたらいいかわからない。

未だ悩んでいる俺を見て、星奈は待ちきれなくなったのか、

「わかった！ もう悩まなくていいから！ その案で行こう、そうしょ！ 仮に上手くいかなかったとしても、あたしがちゃんとして責任取るから！！ おっけー？」

そう強引に話を進めると、星奈は俺に同意を求めてきた。

俺は未だ考えが纏まらず、それに星奈の言った「責任」という言葉に反応してしまい、更に頭の整理が付かなくなってしまう。

責任って何だ？ 一体どういった形で責任を取るのだろうか？ 嫁に来るとかか？ いやいや飛躍し過ぎだろいくらなんでも。香織とどう仲直りするか、その対処に失敗した責任が嫁に来るなんて。てか今そんな事考えてる場合じゃない。えっと・・・何だっけ？

混乱してしまう俺。その間の無言を星奈はどう解釈したのか知らないが、

「うん、じゃーそれで行こう。決定！ この話おしまい！！」

俺の答えを待たずして勝手に話を終わらせた。

「え？ ちょ、まっ・・・」

「うつさい！ 話は終わったの。大丈夫、上手く行くから、いや行かせるから！ 大船に乗ったつもりで、安心してこのあたしに任せなさい！」

星奈は胸に手を当て、自信満々に言い放った。

こんな言われたら、俺も嫌だと言える訳もなく・・・。

「・・・、わかったよ。その代わり、頼むぜ？ これ失敗したら、一生嘘つき野郎って見られるんだからな。それ以下かも知れない」

観念する俺。一応釘を刺しておいたが、不安なのは変わらない。まあ、星奈にも成功するっていう自信があるからこいい切れるんだろうが。

「わかってるって。てかあたしよりも、くわっちの方が大変なんだからね？これで上手く行っても、それからのくわっち次第では簡単にボロが出てバれるんだから。多分あたしもバレたらただじゃ済まないだろうし。諸刃の剣ってやつ？」

あたしからも頼むよ？と、星奈は真剣な表情でそう言ってきた。

そうか、星奈にもそれ相応のリスクはあるんだな。

俺はまだ出会って間もない奴にこんなに尽くしてくれる、しかも場合によっては自分も痛い目を見てしまうかもしれない言うのに、そんな奴と知り合えて、友達になれて良かった。と心底思い、感謝した。

「ありがとう・・・」

頭を垂れる俺。それを見て星奈は、嬉しいようなそうではないような、居心地の悪そうな面持ちで、「いいよ、別に・・・」と視線を逸らしたのだった。

バスケ

それからは、あまり会話は弾む事は無かった。

さつきまでは、本命の話題が在った為感じなかったが、それが終わってしまったら今この状況はただ「同級生の女子の家に泊まりに来た」になってしまう。

学校や、その帰り道とかとは全く違う。お互いこういった事は経験が無いのか（星奈は知らないが）無言の時間が多かった。

気まずい……。俺も星奈も同意見なのか、たまに言葉を発するのだが、それも発展する事無く終了。そして無言に戻る。

このままではまずい、と俺は思い、

「……これからどうする？」

これで数えて何回目になるだろう。答えのわかりきった質問を星奈にする。

「うーん、どうしようかな……」

こちらと同じ返答。流れで行けば、この後また無言の状態に戻るのだが、今回は違った。

「くわっちさ、バスケ、知ってる？」

星奈は立ち上がると、ベッドの脇に置いてあったバスケットボールを手に取り、俺の方を向く。

バスケか……。バスケといえば、

「昔、小学生の頃昼休みにやった事があるけど、あの時も友達はいなくてパスが全然回ってこなかったな！。最初から最後までずっと同じ場所で立ってた記憶がある。……」

俺は暗い過去を思い出してしまい、憂鬱になる。それを見た星奈は「あつ……」と気まずそうに声を上げた。

「っ、つまり！あんま知らないって事だよな？だったら、今からバスケしに行かない？あたしが教え上げるよ！まだ夕方だし、1時間

とかそれ位なら大丈夫っしょ！」

そう言って星奈は右手の人差し指の上でボールを回し始める。・
・うまいな。

回転するボールは、時折左手で回転を強められる。その衝撃で傾いたりする事は無く、そのポジションを維持したままボールは回り続けた。

「このボールは6号球だから、くわっちには多分軽いと思うけど。慣れるにはまずこっちからの方がいいよね」

そう言って、星奈は未だ回転を続けるボールを宙に浮かせ、片手でキャッチする。そしてそのまま俺に放ってきた。

「おっと」

俺はちゃぶ台の上の飲み物を零さないように、高い位置でボールをキャッチした。タイミングが合わず少し危なげだったが、落としたりする事は無かった。確かに軽い。

そのボールは恐らく室内用なのだろう。よく見るゴム製のとげとげした物とは違って、表面は滑らか。しかし外で使っていた為か所々剥けていた。

「さ、行こうよ。リングのある公園、すぐ近くにあるから」

そう言って星奈は先に部屋を出て行った。・・あいつ、制服の
ままでやるつもりなのだろうか。

もしかしたら色々とチラチラ見えるかもしれない、と俺は口元をニヤつかせながら、星奈の後を追った。

「ちなみに今、スカートの下スパッツ穿いてるから」

公園に向かう途中、星奈は言った。え、穿いてんの・・・。

意識せずとも表情を暗くしてしまう俺。それを見た星奈は、軽蔑の視線を俺に向け、

「くわっちも変態さんだねー。バスケだよ？スポーツだよ？？そんないやらしい思考を挿む余地は、どこにも無いんだからね！」

「そう言ってお前、スパッツ穿いてんじゃない・・・」

つい口に出してしまった。何言っただ俺。

「え……。マジで思ってたのくわっち……。放課後の時みたいな失態はもう、絶対しないから。てかあの時の事なんだけど」

少し顔を赤くした星奈は、並んだまま横目で俺の睨んでいた。

「ああ、アレ……。確か青だったな……」

「わーすーれーろおー!!!」

星奈はボールが地面に落ち、転がっていくのを気にも留めず、俺の首を絞めてきた。ガツチリと。く、苦しい……。!!

俺は降参の意で、星奈の肩をパンパンと叩く。が、星奈は一向にやめる気配を見せない。

「忘れるまで、やめないから!!」

そう言っただ首を絞める両腕に一層力を込める星奈。いやいや、そんなにしたら、忘れるどころか死んでしまう……。!!

「星奈ちゃん?」

そこで星奈に声がかかった……。聞き覚えの無い声だ。

その声に反応した星奈は、パツと腕の力を抜き、離す。そして俺からも離れ、その声の主へと振り返る。

「ゲホツゲホツ……。……知り合い?」

俺は聞くが、星奈はそれには答えず、声の主、長身の女性を見据えていた。

「あら、ごめんね。お取り込み中だったかな?でも私も星奈ちゃん最近部活来ないから、心配してたんだよー」

今の状況から推測すると、この長身の女性は多分バスケット部の先輩か何かだろう。それにしても嫌味ったらしい喋り方だな。こっちがム力ついてくる。

そんな俺を、長身の女性は一瞥し、「そちらは彼氏さん?」と尋ねてきた。

「全然、そんなんじゃないありませんから」

その質問に、星奈が答えた。そこまでキツパリ言われると、俺も何かこう、何だろう。

「先輩こそなんですか？いつもは視線すらくれないくせに、今日に限って……。正直言って、迷惑なんですけど」

星奈は攻撃的な態度を取った。そして地面に転がっていたボールを拾い、

「くわつち、行こ。こんなの相手してたって、時間の無駄だから」

と、俺の手を引き、先を急ぐ。そこで先輩から声がかかった。

「ちょこまかするのはコート上だけだと思ってたけど、男もちょこまか変えるのね、星奈ちゃんは」

無駄に大きい声で、周りに聞こえる様に言った。どういう意味だ？それを聞いた星奈の顔は、無表情だった。だがその目を見れば、今星奈がどんな心境なのかを窺い知る事が出来た。

「ちよつとこれ、持ってて」

そういつてボールを俺に押し付け、星奈は先輩の元へと駆け寄り、ブン殴った。

「何なんだよあんなさつきつから！！あたしにレギュラー取られ続けてたのがそんなにムカつくの！？そういつまでも妬まれ続けると、いい加減ウザいんですけど？！大体それだって、あんたがまともに練習してなかったからそういう結果になったんでしょ！甘えてんじゃねーよクソアマ！！」

叫びながらも殴りの乱打を続ける星奈。対する先輩は、何も抵抗する事ができずにされるがまた。

このままでは事件になるかも知れない、と俺は危惧し、二人を止めようと駆け寄るが、

「ぐはっ?!」

勢いを付けるべく引かれた左腕の肘を鳩尾にモロに喰らい、その場でうずくまってしまう。息が出来ない……。

それに気付いた星奈は我に返り、殴る腕を止めた。

「ぐ、ごめん！くわつち！？大丈夫……?」

慌てて駆け寄り、俺を介抱する星奈。

「あ、ああ……。俺は、大丈夫だけど……。星奈こそ落ち着け、

よ・・・」

俺は肘がクリーンヒットした鳩尾を擦りながら、何とか声を出す。

「ごめんねっごめんね！」

星奈は擦る手に自分の手を重ね、ひたすら謝ってくる。

「わ、わかったから！俺は大丈夫だから、心配しなくて大丈夫だって」

俺は星奈を制すると、その後ろでうずくまりすすり泣く先輩へと目を向けた。

口と鼻からは出血していて、頬にはアザまでできていた。

元々、おせじでも可愛いとは思えなかったその顔は、更に酷い事になってしまっていた。

・・・あんな顔で帰れるんだろうか・・・。

星奈は俺のそんな視線に気付いたのか、先輩と俺の間に立ち塞がり、

「あんな奴放っておいて、行くくわっち。そんな心配なんかしたって、ロクな事ないから」

そう言っ、俺の腕をひっぱる。俺は可哀想な顔でこちらを睨みつけている先輩を気にしながら、星奈にひっぱられて行った。

道中星奈はこんな事を言ってきた。

「あいつの言った事、気にしなくていいから。ただの妬みから来た、嘘っぱちだから」

俺はその言葉に、「当たり前だろ。誰が信じるか」と返しておいた。

でも、本当にそうなら、わざわざ言う必要なんか無いんじゃないか？と俺は疑問を抱いてしまった。

当の星奈は、「そうだよな。ははっ、良かったあ」と安心しきった表情で俺に笑いかける。

その顔を見て俺は、どうでもいいか、そんな事。とその疑問を記憶の隅へと追いやり、以後気にする事はなかった。

公園に着くと、星奈は利き腕でボールをドリブルしながらリングへと走っていった。

「やった！誰もいないやつ。二人占めー！」

リング真下で右、左とステップを踏み勢いを殺しつつジャンプ。ボールを持った腕はピンと伸ばされ、最高到達点にて手首で緩く回転をかける。するとボールは吸い込まれる様に、リングへと収まっていた。

あまりにも綺麗に、しかも活き活きとして放たれたそのレイアウトプシュートを見て、俺は体中に何か衝動めいた物が走るのを感じた。膝を屈め、反動を抑えつつ着地した星奈は、ボールを拾うと俺に向かって投げてきた。

「ほら！くわっちもおいでよ！1on1しよーぜ！負けた方が勝った方の言う事、何でも聞くのー！」

大声で、手を大きく振って俺を呼ぶ星奈。負けたら何でも言う事を聞く？なんて魅惑的な言葉だ。

だが、素人同然の俺がバスケット部のエースである星奈に勝てるはずもない。俺は無意識に進もうとした足を止め、その場で考え込む。

負けた方が言う事を聞く。つまり星奈に言う事を聞かせるには、俺は勝たなければならぬ。だがそれは無理だ、経験値が違いすぎる。だが待てよ？どうしてわざわざそんな結果の分かりきった事を星奈はしようとするのだろう。俺に言う事聞かせたいから？それとも、わざと負けて俺から命令されたいから？隠れDMなのかもしれない。いや、勝負に勝って優越感に浸り、更に俺を服従させるという一石二鳥を狙っているのかもしれない。でもそんな嫌な奴みたいな事、星奈がするだろうか？こいつは性格だけは良い・・・とも限らないか。うーん、何だか訳が分からなくなってきた。

俺はそこで考えるのを止め、星奈の元へ向かう事にした。

「おわっ！？」

俺が歩き出すと、星奈にぶつかかった。星奈はそのまま後ろへ傾き、

尻からドサツと倒れてしまう。

「何だよー！呼んでも呼んでも全っ然こっち来ないから、どうしたのかなって心配してわざわざ来てあげたのに！もう、聞こえてんなら返事くらいしてよ！」

星奈は地面に尻をつけたまま、俺を見上げて言った。

「・・・本当にスパッツ、穿いてきてるんだな」

それに対する俺の返事はこれだった。

「はあ？・・・穿いて来たって言ったじゃん！そうでなきゃいつまでもこんな格好でいないよ！」

そう言って星奈は立ち上がり、尻に付いた砂を手ではたく。

「決めた。俺はお前に勝って、そのスパッツを脱がす！」

俺は真顔で言った。すると星奈はみるみる顔を赤らめ、

「はあ！？な、何言ってるのくわうち！！変態！ばっかじゃないの？！・・・折角一から教えてあげようと思ってたけど、もう知らない！教えてやらない！！」

そう言っていると星奈は顔を背け、乱暴にボールをワンバウンドさせ、こちらに放ってきた。

俺はそれを受け取ると、

「そしてそのスパッツを、貰う」

「も、貰う！？」

星奈は動揺を隠せないでいる。ふふ、作戦は成功みたいだな。

俺は意図の計れない言動を言いまくる事で、星奈を混乱させ本来の実力を出せないようにする作戦を実行した。

鈍ってさえくれれば、後は男女の体力の差でどうにかなるだろうと、俺は楽観視していた。

実際女子のバスケをする姿なんて見た事ないし、どれ位のものなのかも当然知らないが、男女間の基礎体力の差を埋める程ではないだろうと、女バスを馬鹿にしている様で悪いが、俺の見解はそんな感じだった。

現に星奈は、「も、貰うって・・・あたしの穿いたスパッツ貰っ

て、何すんの？・・・か、嗅ぐとか？」と考えたくもなさそうな事を考えていた。

実際勝ったとしても、そんな事しないつもりなのだが。うーん、でもスパッツも段々欲しくなってきたかも。

「さあ、始めようか」

俺は軽く屈伸運動をすると、未だ混乱している様子の星奈にそう告げた。

勝者の優越感に浸る未来の自分を思い浮かべ、口元をニヤけさせながら。

勝負は一瞬だった。

一瞬といっても、3回戦の内先に2勝を上げた方が勝ち、といった内容だったのだが。

勿論俺は・・・ 負けた。

俺は馬鹿みたく息を荒げていた。それに対し星奈はと言うと、何でも無いかの様にケロッとしている。

「つまらないよくわっち。全然つまらない」

星奈は眉をハの字にし、心底つまらなそうな表情でもう一度「つまらない」と言った。

やめてくれ、それ以上苛めないでくれ・・・！！

俺はその視線から逃げる様に顔を背ける。そして心の中で愚痴る。・・・こいつ足速すぎる。

1回戦、俺からのオフェンスだったのだが、ドリブルしだした途端にステイル。遠くに飛んだボールを俺は全速力で追いかけるが、後ろからいとも容易く追い抜く星奈。あっという間にこいつはボールを取りやがった。

そして今度は俺がディフェンス。星奈がオフェンスで、これめいとも簡単に俺を抜くと、不思議そうに俺を見つめ、その場でチェストハンドでシュートを決めた。何で抜かれたの？といった表情を終

始星奈はしていた。・・・悔しすぎる。

その後も結果は同じで、結局俺は満足にドリブルすらさせてもらえなかった。

「くっそ・・・何でだ!!」

俺は見苦しく地団駄を踏む。それを見た星奈はクスツと笑い、「見苦しいからやめなよくわっち。あなたは敗者であたしは勝者。もつと潔くなさい!」

そう言っ腰に手を当てる。こいつ、完全に優越感に浸ってやがる。

てか、何を命令されるんだろう。それについては、全て俺が勝った場合の事しか考えてなかったからな・・・。今更だが怖くなってきた。

目を細め遠くを見ながら、うーんと命令を考えている星奈。

「何にしよっかな」

「俺で実現可能な事にしてくれ。7個集めると願い事が叶う玉とか、絶対無理だからな!1つの奴でも3つの奴なんか星が違ってから絶対に無理!!」

俺は命令される立場にも関わらず、注文をつけてしまう。まあ実際それを命令されても実行は不可能なのだが。

俺のそんな注文を聞いているのか聞いていないのか、星奈はブツブツと何か呟いている。たまに俺を見て、目が合う。

「じゃあ、さ・・・」

何やら言い辛そうに口籠る星奈。何だ?何なんだ?そんなに言い辛い命令なのか?いいから一思いに言ってくれ!そう躊躇われるとこっちが怖い!!

とうとう意を決したのか、星奈は顔を赤くしつつ、

「付き合って!・・・とか、言っちゃったら?」

とか言っちゃった。

「・・・?」

俺には良く意味がわからず、首を傾げる動作で返してしまう。だ

ってわかんないんだもん。

付き合ってたって、俺と星奈が恋人同士になるって事か？ねーだろ、だって俺達、知り合ってたまだ2週間とちよつとだぜ？

どんだけ惚れっぽいんだよ。

俺は自分の中でありえないだろ、とそう結論付けた。

対して星奈は、俺のその白けた反応に眉根を一瞬寄せるも、すぐにいつもの表情に戻り、

「ははっ、冗談だって！だってそんな出会ってまだ少ししか経ってないのに、そんな惚れっぽくないってあたしもさー！」

バチンッ、と俺の方を叩いた。いや、殴ったか？結構痛かったぞ？今の。

まあスキンシップだと思い、俺は気にせずそのまま続ける。

「で、勝者の星奈様はこの惨めな敗者に何を命令されるのですか」俺はため息をつき、促す。出来れば早く終わらせたい。

だが、俺の心配とは裏腹に、星奈の命令は以外なものだった。

「明日も、泊まっていけない？いや、泊まってけ！」

「・・・そんなんで、いいのか？」

そんなの、むしろこっちからお願ひしたい事だ。

「え？あ、ああいや、嫌だったらいいんだよ？大体女子の家に泊まる事自体気まずいだろっし、漫画喫茶代なら少し貸すし、無理しなくていいんだよ？！」

何故か弱腰になる星奈。命令出来る権利を得たはずなのに、どうしてだろう。

「いや、それについては後で俺から頼もうかと思ってたから、丁度いいや。何だ、もっと凄い事言われるのかと思って心配しちゃったよ」

俺は笑い、そう言った。安堵したからなのか、明日もまた今日みたいな日になるのかと、楽しみなのはわからないが、自然と笑いがこぼれた。星奈もそれにつられて笑い出す。

「ははっ、なーんだ。ならわざわざ1on1、する必要なかったじ

やん。気持ち良かったから良かったけど！」

そう言って、星奈は再び俺にボールを放ってくる。

「今度はちゃんと教えてあげるよ。1から丁寧にね。・・・まずはダンクからかな？」

「いや、・・・無理だ」

二人して笑いあい、そこから星奈のバスケット講座が始まった。

日が暮れる前には帰る予定だったのが、いつの間にか視界がおぼつかない程暗くなってしまうていた。

あまりに楽しく、そして熱中していたため、普段なら気が付く外の暗さにも気が付かなかった。

「・・・もうこんな時間か」

俺は運動により火照った身体を一旦休める。物凄い量の汗だった。それは星奈も同じようで、制服の上のワイシャツは汗で透けていて、肌色と共にブラジャーの色やラインが浮かび上がっていた。

ブラジャーの色やラインが浮かび上がっていた。大事な事なので2回言うぞ。

「上も青なのな」

「うひゃっ!？」

慌てて胸の辺りを隠す星奈。てか気付けよ。

「くわっち、さっき言ったよね？スポーツにそんないやらしい思考を挿む余地は無いって」

星奈は恥ずかしそうに、上目遣いで俺を責める。

「いやでも、今休憩中だし？」

「休憩中だし？じゃない！休憩中だろうが何だろうが、ダメな物はダメ！！遠足は帰るまでが遠足って、言うでしょ?!」

食い付く星奈。そんなやり取りを何度か繰り返し、どちらからともなく、笑いあった。

「・・・楽しいな」

俺はつい、口に出す。今まで、こんな友達など持った事がなく、

こんなに楽しいと思える事も無かった。

この気持ちが果たして相手と共有できているのだろうか？と不安だったからだ。

「楽しいね、これで香織とも仲良くなって、クラスの男達とも仲良くなれたら、きつともっと楽しいよ」

と、星奈は同意してきた。少し自嘲気味な口調だったのが気になるが。

すると星奈は立ち上がり、「帰ろうか」と帰宅を促したので、俺も立ち上がる。

「おう、帰るか。今日からお世話になるわ」

「あいよ、お世話されなさい」

と星奈は笑い、手を差し伸べてくる。

俺はその手を取るべきか取らないべきか、少し迷ったが、結局取り、二人は手を繋ぐ形で帰路へついた。

兄妹

俺は今、とてもイライラしている。

今日の夜は熱帯夜になると、今朝の天気予報では言っていた。実際肌を撫でる空気は嫌な位ジメジメしていて、気分が悪い。

風もほとんどなく、動きのない熱せられた空気の中、俺はひたすら無言で歩いていた。

俺の数歩後ろには、実の妹”だと思っていた”葵が歩いている。顔を見る気にはなれないが、時折聞こえる息遣いの音からすると、恐らく泣いているのだろう。

だが今は、それに対して何の感情も沸かなかった。

俺は今、とてもイライラしている。その原因が葵だからだ。

事の発端は、つい30分程前。俺と星奈が公園から家への帰路を歩んでいる時だった。

「っはー！！久しぶりだよー、部活以外でこんなに汗流したの！！」
頭の後ろで腕を組み、熱帯夜にも関わらず気持ち良さそうに歩く星奈は、俺に向かって爽やかに言い放った。

「お前、こんなクソ暑い中よくそんなテンションでいられるな・・・」

こいつの周りには、湿気や熱気その他諸々がシャットアウトされるバリアめいた物でも展開されているんじゃないか、と疑ってしま

う。
そう思ってしまう位、星奈の態度はこの場において相応しくなかった。

俺はというと、慣れない運動とこの気温のおかげで、すっかりダウンしてしまっていた。しかも服は上下とも汗ビツショリ。歩く度に気分が悪い。

でも、そんな状態の俺とでも、星奈はこんなに楽しそうに話して、笑ってくれる。

おかげで俺も少し元気を取り戻せた。笑いあいながら話す程度には。

「でもくわっち、なかなかセンスあると思うよ。運動神経も悪くないみたいだし、この際男バス入っちゃえば？」

星奈が提案してくる。確かに今日は、たった数時間でかなり上達した、と自分でも思ったが・・・。

「俺にセンスがあるんじゃないかって、星奈の教え方が上手いからだろう？何だろう、目の付け所が違うつていうか・・・。実際部活入って先輩とか同級生とかに教えてもらっても、今日みたいには行かないと思うぞ？」

俺は素直に思っている事を伝えた。星奈の言う事は全体的確で、なおかつ「なるほど」と言える様な、筋の通った内容だった。

「流石にエースともなると、違うよな」

俺がそう言うのと、星奈は頭の後ろで組んでいた腕を解き、歩みを止めた。そして口元に手をやり、何か考え事をし始めた。

「・・・どうした？星奈？」

何かまずい事でも言ってしまったかと俺は一瞬不安になったが、それは杞憂だった様だ。星奈はすぐに顔を上げ、口を開いた。

「くわっち、ちよつとそこで話さない？ジュース奢るからさ」

星奈はそう言つて、俺の返答も待たずに丁度近くにあった自販機まで行くと、「何がいい？」と聞いてきた。

俺は星奈の意図がわからず、しばらくその場で固まってしまった。どうして外で話す必要があるんだろう？家に帰ればエアコンもあって、夕方に買ったジュースもあって、星奈ママが用意してくれているであろう晩御飯まであって。

ただ、俺の返答を待つ星奈の視線には、有無を言わせない何かを感じた。

「・・・サイダーでいいや」

疑問は全て忘れる事にし、俺はこの謎な展開に流される事にした。

「それで、話って何だ？」

俺は星奈から手渡されたサイダーの栓を開けると、一気に喉へ流し込んだ。星奈との会話で気付かなかったのか、喉は物凄く渴いていた。

一度で全て飲み干してしまうのではないか、という感じの勢いで缶を傾けた俺だが、炭酸特有の刺激に耐える事が出来ず結局1/4程度飲んだ所で口を離した。

喉の痛みで少し涙目になってしまった俺を見て星奈は笑いながら、「あっちの方に小さな公園があるからさ。そこで座って話そ？」

そう言って俺の手を引き、足を進めるのだった。

公園へ着くと、早速星奈はベンチではなくブランコの方へ腰を下ろし、口を開いた。

「さっき、『流石にエースともなると、違うよな』って言ったじゃん？」

何か逆鱗にでも触れてしまったか！？と俺は内心ビクビクしながらも、「言ったよ」と返す。

「あたしさ、最初友達なんて全然いなくて、クラスにも全然馴染めなかった。部活なんて尚更」

いきなり始まった星奈の独白。俺はそれを聞いて、星奈ママとの会話を思い出した。

『だって、まだお互い知り合って2週間ちょっとしか経っていないんでしょ？それなのにここまで発展できるのって、中々無いと思うわよ？』

「唯一香織だけが、あたしと友達でいてくれた。まあ、小学校から

の付き合いだからっていうのもあると思うんだけど」

『あの子、女の子でも男の子でも、あんまり友達いないのよね。それには色々と言があるんだけど』

「でも香織とは、1年の時はクラスが違ったから。中学が一緒の奴らもいっぱいいたよ？でも、皆あたしの事、避けるんだ」

淡々と語る星奈。ふと顔を上げ、俺を見つめるその顔は何か物憂げだった。

『それはあたしの口からは言えないわね。本人から直接教えてもらって。難しいと思うけどね。多分あの子にとってもいい思い出とは思えないから』

「それは・・・」

俺は口にしようとして、躊躇ってしまった。何故かはわからない。そんな俺を見て、星奈は黙って続きを待っている。何かを期待している様な、諦めている様な、どっちとも取れそうな不思議な表情で。

「それは、・・・俺に言っている事なのか？こんな新参者なんかにさ」

別に星奈を拒んでいる訳ではない。ただ、これから言おうとしている事が、彼女にとって辛い過去なのであるなら、無理して言わなくても良いと、わざわざ蒸し返す必要なんて無いと、そう言いたいんだ。

その意図はちゃんと星奈にも通じた様で、何かに納得した様な仕草で頷くと、ブランコから立ち上がり俺の目の前まで歩いてきた。

「あたしは、くわっちだからこそ聞いてもらいたい！あたしがどんな奴なのか、しっかりと知った上で付き合ってもらいたい！！過去と今のあたしじゃ、違うけど・・・、全部ひっくるめて知ってもら

いたい!!」

聞いてくれる・・・?と最後に付け足し、星奈はそこから黙ってしまった。ただ、視線は真っ直ぐ俺を向いている。

その瞳からは、強い決意の意思が伺え、俺は星奈が本気なんだとわかった。

「聞くよ。例え過去に星奈が何をしても、俺は今の星奈が嘘だとは思えないし、思わない。もし星奈がいなかったら、俺はこんなに充実した日々を送る事は無かっただろうし、香織の事で悩んだりする事も無かったと思う。そう言い切れる位、俺の中で『水落星奈』っていう人物は大きな存在で、だからこそこういう奴なのかってのを、俺は知りたい」

俺は星奈の目を真っ直ぐ見据え、思った事をありのまま口に出した。恥ずかしさなんてのは感じなかった。そんなの、星奈の決意に比べたら、そこら辺に落ちてる砂利と同じ様なもんだろ?

俺の返答を聞いた星奈は、一度顔を伏せ、何かを堪える様に身体を震わす。そして顔を上げて、

「あたしね」

「お兄ちゃん!」

・・・え?

俺は慌てて声のした方へと振り向く。星奈は、どうしたらいいのかわからないといった様子で、固まってしまっていた。

その空気を読まない声の主は、公園の入り口付近から懐中電灯を灯し、俺達の方を向いていた。

逆行で相手の顔を伺う事は出来ないが、そんな必要はない。声でわかる。

そいつは俺の実の妹　　葵だった。

「やっと見つけた・・・!お兄ちゃん、何してるのこんな時間にこんな所で!!」

駆けてくる葵。それを聞きたいのはこっちなのだが。

香織の時といい今日といい、どうしてこいつは毎回タイミングが

悪いのだろうか。

「葵ちゃん・・・」

星奈が妹の名を呟く。その表情には、先ほどの強い意志は欠片も無く、ただ弱々しかった。

葵も星奈の存在に気付いたのか、一旦足を止め忌々しそうに見つめる。

「・・・水落さん、何してるんですか？こんな時間に」

葵の口調からは、目上の人に対する敬い等は一切感じられなかった。

ただドス黒い感情だけが、ひしひしと感じられた。一つも隠すことなく、嫌悪感をむき出しにしているのがわかる。

「おまえこそ、何してるんだよこんな時間によ！あと、その態度やめろよ、何様だよ！！」

俺の睨みに葵は一瞬怯むが、すぐに調子を戻し反論してきた。

「あたしはお兄ちゃんを探してただけ！大体、連絡しても出ないで通帳もカードもおきっぱだし！こんな時間まで帰ってこないで一体なにしてるのかって、心配にならない方がおかしいでしょ？！何様だよはこつちだよ！！」

葵は俺を睨み言っと、次は星奈に食って掛かった。

「それで心配でしらみつぶしに探してたら、友達以上彼女未満の女と一緒にいて、何やら変な雰囲気になってるんだよ？こつちの気も知らないでさ・・・！」

それはいくらなんでも言いすぎだろう。それに、俺を心配で探しに来たんなら何故星奈にそこまでつかかる。

身の安全が確認できればそれでいいはずなのに。それで携帯が壊れた事を伝えて、星奈に連絡先を教えれば安心できるだろうに。

葵の星奈へ対する態度のあまりの酷さに、俺の怒りは頂点に達していたが、今までの事がある以上無闇に怒り散らすのも得策ではない。第一今回は二人きりではない。

そんなこんなで俺が色々考えている横で、星奈が葵の元へ歩いて

いった。

「ごめんね、葵ちゃん。くわっちの携帯は、朝あたしの所為で壊れちゃって……。連絡できなかつたのはあたしの所為だから、謝るよ。ごめんなさい!!」

頭を垂れる星奈。おいおい、何でお前が謝るんだよ!!

そんな星奈を目の当たりにして、表情一つ変えずに佇む葵。

「でも、事情をくわっちから聞いて、くわっちも家帰りたくなさそうだったから、お金も無いし……。んで、落ち着くまであたしん家に泊まるって事になって……」

「何で泊めるんですか？知り合ってまだ2週間ですよ？お金の貸し借りなら兎も角、泊めるっていうのは同性同士でも行き過ぎだと思えますけど」

「おい！葵！！てめえ何なんだよさつきからその態度！！こいつは親切でやってくれてんのによ、お前！大体原因は母親だろ？そっちに当たれよ！見当違いも程ほどにしるよ……。！」

もう我慢が出来ない。言われないとわからないのか、こいつは……！！

「親切？本当にそうかな……。あたしには下心満載に見えるけどな。それと、お母さんにはもう言ってきたよ。どうしてお兄ちゃんにばっかそう言う事するの？って、怒鳴ってきたよ。それと見当違いっていうのも、携帯壊して連絡繋がらないっていう点で見たら、そうじゃないんじゃない？」

執拗に食いついてくる葵。一体何が気に食わないっていうんだ？「あんな……。いい加減に自重しろよ！人様の交友関係にまで口出ししやがって。俺達只の兄妹だろ？！人の領域にズカズカと無断で入ってくんじゃねえよ！ウゼーんだよ!!」

俺が怒鳴つたのを皮切りに、その場はシーンと静まり返った。

葵はただひたすらに俺を見つめ、星奈はというと、今にも泣き出しそうな表情で俺と葵を見渡していた。

一体何なんだ、この状況は……。何故俺は妹なんかと修羅場を

繰り返しているんだ？訳が分からない。

それから無言の時間は、酷く長く続いた、様な気がした。実際は一瞬だったのかもしれない。

わからない。わからな過ぎてそれについて考えるのも酷く億劫で、ひたすらに相手の出方を伺う状態。

一体葵は何を考えているのだろうか？一体、星奈の何が気に入らないのだろうか？

そんないつまでも答えの出ない自問自答を頭の中で繰り返しながら、俺は葵をジーツと睨みつけていた。

「……、違ったら？」

葵が口を開いた。……どういう意味だ？

「違ったらって、何がだよ？」

「あたしとお兄ちゃんが、兄妹じゃなかったら……、て事」

「……」

言葉の意味がわからなかった。

兄妹じゃなかったら？そんな訳ないだろう。俺は物心ついた時からそばに葵が居たことを覚えているし、小学校高学年まで一緒に風呂入ってたし。

大体そんな事実があつたのなら、何故今まで知らなかった？両親からも何も言われなかったし、葵にしたって今までの様子を思い出せば知ったのは今日昨日の話だろう。

仮に本当だとしても、何故今更……？それと今回の件に、なんの関係がある？

それを俺に言っで、どうする？

「……聞いている？」

痺れを切らしたのか、葵が尋ねてきた。

「聞いているよ。……どういう意味なんだ？」

俺のその回答は、どうやら葵の期待していた物とは違っていらしく、イラッとした様に眉間に皺を寄せ俺の方に詰め寄ってきた。

「ほんつとにあんた鈍すぎ！！何なの！？今まで我慢してきた

けど、流石にこの場でそれやられるとムカつくわ!!」

鈍くて悪かったな。自分の事棚に上げて良く言う。

「そんな事言われてもなあ……。わからないものはわからないんだよ!じゃあ、俺は何て言えば良かったんだよ?」

「そ、それは……。うう……。察するとかできないの!?」

「だから……。何をだよ!!」

いい加減にしろよこいつ……。マジで。

「だから……。あたしが……。あたしが妹じゃなくて一人の女の子だったら、あんたは……。そいつに気にかけるのが嫌かって事を聞いてんだよ!!」

もはや絶叫。耳をつんざく金切り声が、午後九時を回った人気の無い閑静な住宅街に響き渡る。

目一杯溜められた涙が決壊した様に頬を伝い、振り乱した髪が汗と相まって酷く湿った頬に張り付く。

この時、冷静であれば俺は、ちゃんとした答えが返せたんだろう。ただ、俺はこの時冷静ではなかったし、日頃の葵の言動というか行動というか、こういった思わせぶりの発言が多々あったのも事実で……。

「ちょっと待て。俺とお前が兄妹じゃないってそれ、冗談じゃなかったのか?」

「え、ちょっと……」

小さく、星奈の呟きが聞こえた。

「……………」

対する葵は、完全に固まってしまっていた。

涙を拭う事もせず、張り付いた髪を払う事もせず、ただその場で信じられない」といった様で、俺の事を見上げていた。

「おい、葵」

「くわっち!!」

俺の元へ駆け寄ってくる星奈。俺を見るその視線からは、なんだから軽蔑の様な、不快な感情が読み取れた、気がした。

「あたし、もう帰るからさっ。くわっちも今日、家帰りな！ご両親とも話す事とか、あるだろうし。携帯は今度あたしが新しいの買っておくから！き、今日はごめんね！」

それじゃ！と星奈は俺と葵を一瞥すると、駆け足で、逃げるかの如く走り去って行った。

俺はその姿を目で追う。しかし星奈は一度もこちらへ振り向く事は無く、視界から消えていった。

確かに逃げたくなるのもわかるよ。二人で楽しくわいわいやつていたところに、無関係な奴が乱入してきていきなり大喧嘩始めて。そつえば星奈も俺に何か話したがっていたけど、何だったんだろう？

まあいいか。それはまた次の機会にでも。

今はそれよりも・・・。

「おい、葵？・・・葵！聞こえてんだろ？返事くらいしろよ」

今日という日を台無しにした張本人を問い詰めるのが先決だ。まださっきの答えも聞いてないし。

ところがどんなに声をかけても、葵は俯き反応を示さない。・・・面倒臭い奴だな本当に。

俺がもう一度声をかけようとした時、丁度葵の携帯へ着信が入った。

それを取る葵。・・・相手は母親の様だった。

「もしもし、お母さん？・・・うん。うん、お兄ちゃんは見つかったよ。・・・うん、わかった。ばいばい」

携帯を閉じてポケットに戻すと、葵は俺の方を見ようともせず、「お母さんが帰ってこい、だって」

と一言告げ、とぼとぼと先を行こうとする葵を俺は止めた。まだ確かめてない。

「待てよ」

「何・・・」

肩を掴んだ腕を見て、忌々しそうに俺の顔を見上げる。

「さっきの兄妹じゃないって話、本当なのかよ？」

「だから・・・鈍すぎだっつってんの。ここまで来て、まだ本当か嘘かの区別も出来ないわけ？」

心底嫌そうに答える葵。横目で俺を睨み、すぐ視線を逸らす。

「悪かったな・・・！」

そこからお互いに一言も発する事なく・・・。

今に至ったという感じた。

回想にどの位時間がかかったかわからないが、気付けば俺は自宅の前まで来ていた。

後ろを見ると、先ほどと変わらず数歩後ろを葵は歩いていた。

もう大分落ち着いたのか、泣いている様子はなかった。

色々考えたおかげで、大分頭の中の整理ができたのか、俺も葵に對してそれほど怒りを感じてはいなかった。

それでも、さっきの星奈への態度の悪さは認められないし、許す気にもなれないが。

「・・・葵」

聞くかどうか迷ったが、聞くことにした。

ここで聞かなければ、後に待っているのは両親からの話だろうし、今の感じからして葵が自分から話してくる事もないだろう。

このままうやむやになるより、どうしてもあの時あ言ったのか、何を考えてそうしたのかをはっきりとさせたい。

「っ！・・・何よ」

俺の呼びかけに対し、葵は短く呻く。そして俯いたままこちらを見ずに答える。

俺は葵のその態度に少しイラッとしたが、そのまま話を続ける。

「どうしてあの時、星奈にあんな態度を取ったんだ？」

俺は単刀直入に聞いた。なに、あんな事されて今更氣を使う氣にもなれない。

「それは・・・」

言い難そうにする葵。両手を前で組み、指をせわしなく動かす。

そんな葵を見て、昔小学生だった頃に先生に呼び出され、叱られていた時の自分も同じ様な事をしていたな・・・と、昔の事を思い出す。

（そう言えば、あの時は何をして怒られたんだっけ？）

「・・・それは、何だ？早く言えよ」

俺は葵へ返答の催促をすると、また過去の記憶について思考を巡らす。

（確か、同じクラスの女子にちよっかい出して、それがどんどん悪化して嫌がらせになって・・・。）

思い出せば思い出す程恥ずかしい、幼い頃の自分の記憶。何故あんな事をしたのだろうか？

自己嫌悪が酷く、思い出すのも嫌なその記憶。だがどうしてだろう。今はやたらと氣になり、しかも自ずと蘇ってくる。

（俺はその娘が好きで・・・）

当時はそんな事考えもしなかったが、今考えるとそれは好きという事になるのだろうか。

葵を見る。葵は未だに顔を俯け、指は動かしたまま黙りこくっている。

（最初は自己主張で、ただ氣にして欲しい、それだけの感情でちよっかいを出していて・・・）

温く湿り気を帯びた風が、頬を撫でる。だがそれはすぐに治まり、また動きのない空氣に戻る。

まるで今の二人みたいに。

（だけどそれが、あまり相手にされずに段々やきもきしてきて、最終的に只の嫌がらせに・・・）

・・・ん？

そこで俺はふと思った。

それは、今のこの二人の状況に似ているのではないか？

怒る側、怒られる側。される側、する側。

そこで俺は、これまでの葵の自分に対する行動を思い出す。

部屋を勝手に片付けたり、料理を妙に頑張ったり、誕生日忘れただけで激怒したり・・・まあこれには両親不在という別の理由があるのだが。

キス未遂をしたりキスしたり。それを対象をあやふやにして両親に言いふらしたり。

そして今日の星奈への態度。それと同時に明かされた事実

兄妹ではない。

つい30分程前に言われた葵の言葉が、鮮明に脳内に再生される。

『だから・・・！！あたしが・・・あたしが妹じゃなくて一人の女の子だったら、あんたは・・・そいつに気にかけるのが嫌かって事を聞いてんだよ！！』

あの時俺は、どんな気持ちだった？何をして、一向に相手にしてくれない女子を見て、俺は一体どう感じていた？

「葵・・・お前」

自然と、口は開いていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4246p/>

猫と転校生

2011年3月6日07時40分発行